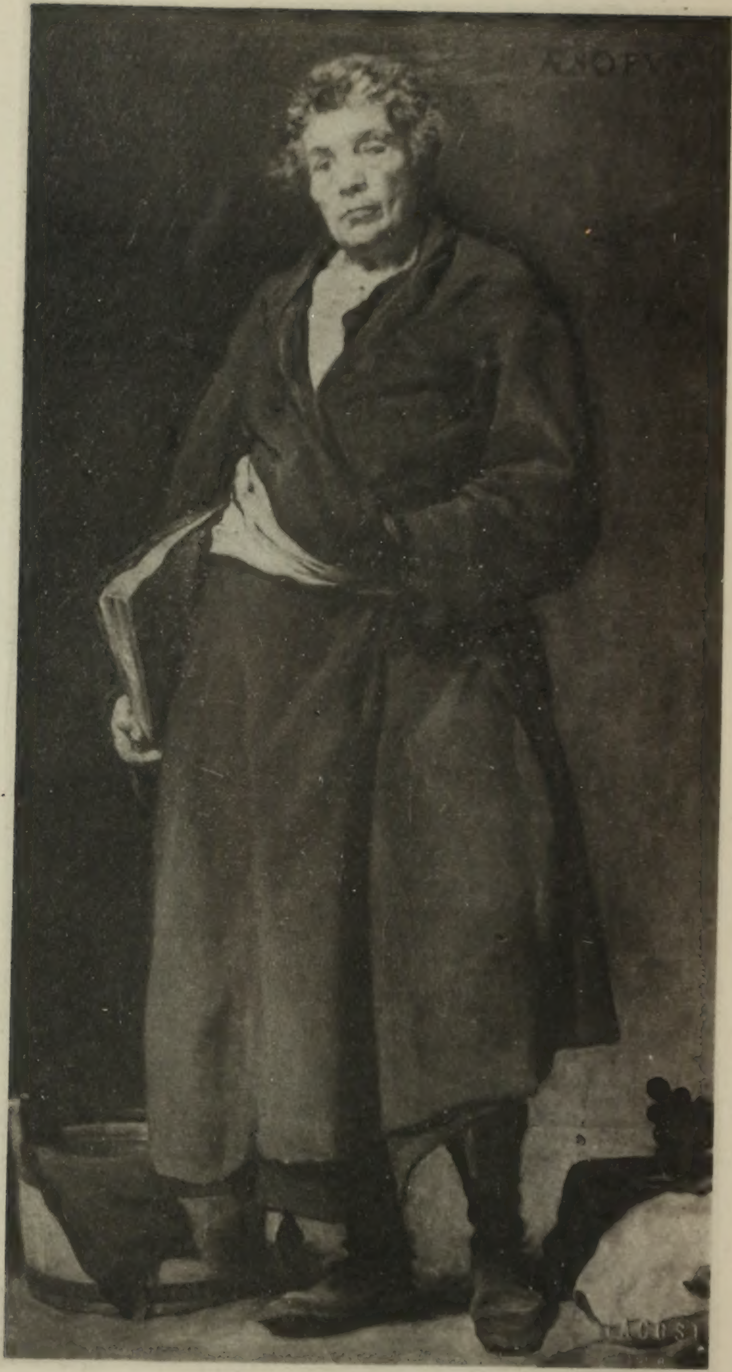
京都帝國大學文科大學教授 文學博士 新村出 挍

文祿舊譯伊曾保物語

東京 開成館藏版



ESOPONO FABVLAS.

Latinuo vaxite Nippon no cuchito nasu mono nari.

IEVS NO COMPANHIA NO Collegio Amacusani voite Superiores no gomenqiotoxite coreuo fanni qizamu mono nari.

Goxuxxe yori M. D. L. XXXXIII.

ESOPO GA XOgaino monogatari riacu.

COREVO MAXIMO PLANVDE

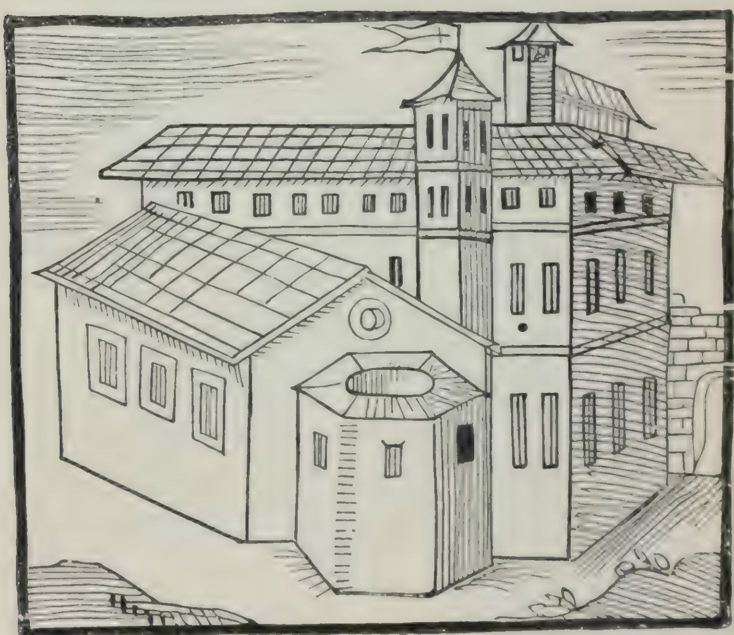
toyŭ fito Gregorio cotobayori Latinni fonyacu xerarexi mono nari.

EVROPA no vchi Phrigiatoyŭ cunino Troia toyŭ jŏrino qinpenni Amoniato yŭ ſatoga vogiaru. Sono ſatoni naucba Eſopoto yŭte, yguiŏ fuxiguina jintaiga vogiattaga, ſono jidai Europano tencani cono fitoni maſatte minicui monomo vorinacattato qicoyeta. Mazzu cŭbeua togari, manacoua tçubô xicamo dete, fitomino ſaqiua tairacani, riŏno fôua tare, cubiua yugami, taqeua ficŭ, yocobarini, xeua cugumi, faraua fare, taredete, cotobaua domoride vogiatta. Corerano ſugata vomotte minicuicoto tenca buſŏde atta gotoqu, chiyeno taqeta monomo cono fitoni natabu cotoua vorinacatta.

Arutoqi xujin Eſopoga vyeuo vomouaruru yŏua: cugaino ſabaqi, aruiua naixôno toriatçucai nadoua icanimo niyŏmajijto miyureba, xemete nôninmo xoſauo naritomo ategauŏzuto vomoi ſadame,

中はまハさらハとて志座んとに浅にいら承しり
ふ所ありふろ承のきゐ人いらといふに丢れり所を
さらさ志座んといらかをめして給きるハ没なまの
ゆへをもつてりに浅ゆ伏ひと一人といひらふそや
とひ竹へハいうか誉云先よふ注乃門に出いわにさ
りりけるりしおわ々わ人おきらく覚にふ座さまさやらく
とい色々もあきをめそくそれよわして出いわ楽恵
ふけ君りれひと一人とやけ覚こふへ巻さなわ
其七　志座ん覚うしかのまんとけい座くしる
あ体時志座んと酒に酔きるうちにうりしこさ風
よふ所におあ人志座んと延ちへそいもく猿遊ハ





目次

畫圖目次

解説

原書題して「エソポのファブラス」といひ、かの有名なる喩言を拉丁語より我國の俗語に譯し、羅馬字に綴りたるを、西紀一五九三、文祿二年天草の耶蘇會學林に於て開板せるものなり、今之を國字に書改め、私に標して文祿舊譯伊曾保物語とす。原本元と單行にあらず、予が曩に解題考證せる天草出版の平家物語と合綴し、扉の紙を除きて全書の四〇九頁より五〇六頁に至る九十七頁を占む。雁皮紙摺小形本にして、現に大英博物館の珍藏たり。

明治四十二年九月十月史學雜誌第二十編第九第十兩號所載拙稿「天草出版の平家物語拔書及其編者について」參照。

全書の總序の略に云く「此の一巻には日本(につぽん)の平家といふイストリヤと、モラーレス、センテンサスと、エウローパのエソポのフヮブラスを押すものなり。然れば此等の作者はゼンチヨにて、其の題目もさのみ重々しからざる儀なりと見ゆると雖も、且つうは言葉稽古の爲め、且つうは世の得(とく)の爲め、此等の類(たぐひ)の書物を板に開くことは、エクレシヤに於て珍らしからざる儀なり(下略)。」序は同じく西紀一五九三年二月二十三日の書、我文祿二年正月二十二日に當る。序中、ゼンチヨ(葡語)は敎外の徒の義、平家物語といふ史書(イストリヤ)も、四書七書等より集めたる金句(モラーレス、センテンサス)集も、エソポの喩(フワブ)言(ラス)も、共に耶蘇敎より見れば、外道の書なるを謂ふ。

喩言の部、扉紙の表面に題して云く、

エソポのファブラス。

ラチンを和して日本の口となすものなり。
ゼススのコンパニャのコレジオ天草に於てスペリオーレスの御免許として之を板に刻む者なり。御出世より一五九三。

紙面の中央には、日本の紋様の意匠を刻す。其等の體裁は口繪の寫眞にて示せるが如し。其裏面には例によりて左の如き緒言あり。

讀誦の人へ對して書す。

總じて人は實もなき戲言には耳を傾け、眞實の敎化をば聞

くに退屈するに由つて、耳近きことを集め、此物語を板に刻むこと、例へば樹木を愛するに異ならず。其故は植木は益なき枝葉多しと雖も、其中に好き實あるを以て枝葉を無用と思はぬが如くなり。斯故にスペリオーレスの仰せを以て此物語を拉丁より日本の言葉に和らげ、種々の穿鑿の後、板に開かるゝなり。是れ眞に日本の言葉稽古の爲に便となるのみならず、善き道を人に敎へ語る便とも成るべきものなり。

以て本書出版の由來を知るに足るべし。緒言の末別に紀年と譯者の名とを記さず、或は平家物語の口譯者ハビアンと同一人なるか、尙攷ふべし。

本書先づ「エソポが生涯の物語略」とてエソポの略傳凡三十四頁（自四〇九至四四三）あり、次に本篇に題して「エソポが作物語の拔書」といふ。凡五十九頁（自四四三至五〇二）分ちて上下二篇とし、收むる所の譬喩談、上篇に二十五、下篇に四十五、通じて七十、尾に目錄を附し、更に添ふる所の金句集（明治四十四年一月藝文第二年第一號參照）を隔てて加ふるに「此の平家物語とエソポのファブラスの中の分別しにくき言葉の和らげ」と題して、二十一頁に亙る難語解を以てす。例へば「憧るゝ ― 切りに物を望む、憧るゝこと、又戀ひこがる」の如し。

抄譯者の據りたる拉丁原本の出版年次及場所は今不明に屬し、從ひて對照の便を得ざるを憾とす。但しサトウ氏既に一五四五年巴里版の拉丁本を以て、喩言の題目を對照せられたるあ

り、參考に供すべし。（日本耶蘇會士出版書目。）

文祿舊譯本の一半を成す「エソポが生涯の物語略」は「之をマシモ・プラヌーデといふ人希臘（グレゴ）の言葉より拉丁（ラチン）に翻譯せられしものなり」とあり。抑もマキシモス・ホ・プラヌーデースはビザンツの學僧、一二六〇年頃（龜山帝文應元年頃）ニコメヂアに生れ、首都にありて主として敎化に從事し、拉丁學の巨匠を以て聞ゆ。一二九六年入伊、ヱネチアに使ひし、斯學の造詣益〻深く、ビザンツ古學之に由て進む。後百五十年君府陷りて、藝文の士相率ゐて西遯するや、古典學勃興の機運の開けたるもの、其源流遠くプラヌーデースにあり。一三一〇年頃（花園帝延慶三年頃）五十歲にして寂す。其論著編纂翻譯せるもの少しとなさず。神學上の著述、希臘古經の註釋、

地誌史籍の編纂、古書の開板等、文獻學上の事業の當代を利し後世を益せしは言ふに及ばず、敎化に資するが爲に廣く俚諺を蒐集せる功亦多とすべし。伊曾保傳亦幾多の古寫本によればプラヌーデースの作と傳へらる。師既に俗諺を集めて敎訓の具に供し、又別に散文を以て伊曾保物語を編せるに由りて考ふれば、伊曾保傳も其手に成りしものと見て可ならむ。然れども、傳記の資材は元と實歷に出でたるに非ずして、遠く希伯來の古傳說に胚胎す。其古傳說の流れて希臘に入りたるもの、融合して夙に痕跡を舊記に留めたるあり、以て一徵とすべし。（クルムバッハーのビザンツ文學史再版本參照。）さはれ、此說話の分析は、伊曾保其人の實傳を考證し、各喩言の傳統を追究し、一部物語結集の由來を探求し、且つ各國

の譯本異本を稽査するの事業と共に、今此の文祿舊譯本の解説に直接關係する所無きを以て、他日に讓るべし。（斯書附錄の「補註」參考。）

プ師の伊曾保傳の古鈔異本甚だ多く、而して一五〇五年（永正二年）始めて開板せられしより古刊本亦少しとせず。伊太利にありて、アレッツォーのリヌッチオが拉丁に譯したるは、一四四八年（文安五年）以後にあり。爾來板を重ぬること數次に及び、西歐諸國の重譯本之に據りたるもの多し。南蠻の伴天連が我國に將來し、教訓及語學の資料として天草の學林より出版せる文祿譯本の原書は、此等の拉丁譯本の一なるべけれど篇中の地名人名は葡萄牙流に讀下されたり。「マシモ・プラヌーデといふ人希臘(グレコ)の言葉より拉丁(ラチン)に翻譯せられしものなり」と註すれば、プ師自ら拉譯

せしこともあるにや。

文祿舊譯本の外に、元和活字を以て出版せる國字譯の伊曾保物語三卷あり。朝倉氏の日本小說年表には同慶長活字本を標出し、元和に至りて再摺せる由を註し、大槻博士も慶長本の存在を述べられたれど「六大先哲」所收「青木昆陽」、是れ予の未だ見ざる所、又開板前、繪卷物として傳はりし別本ある由、水谷氏の列傳體小說史等にて傳へられたり。寬永十六年刊本以下、元祿の前後に涉りて文字及び版式に些少の變化を與へて重摺せしことあるが如く、又後世全く改版せし事もありと聞こゆれども、予の知れる限にては萬治二年の新刻本三卷、繪入にて見る目に興味最深し。以上の異板本は文字にこそ多少の相違あれ、同一譯本にして、而かも

文祿舊譯本とは全く異なり。啻に文祿本が羅馬字を以て綴り、口語にて記され、慶元活字本が國字を以て書き、俗文にて編まれたるの相違に止まらず、書名、卷の分ち方、目錄の揭げ樣は勿論、「拔書」と銘打ちたる文祿抄譯本と慶元譯本とを比するに、喩言の數、順序繁簡等より伊曾保傳の序次精粗に至るまで差別著るし。且つ一本に揭げたる說話にして他本には載せざるもの甚だ多く、說話の數文祿本七十、慶元本六十四、二本の一致せる說話は僅かに二十四に過ぎず。卽ち慶元の國字譯本は文祿の羅馬字譯本に據りしにあらざること最も明かなり。俳人去來の父向井元升が萬治二年一六五九筆錄せる「乾坤辨說」の如きは、葡人の歸化して澤野忠庵といへるが元と和文羅馬字綴にて西洋天文說を稿

せるをば、長崎の通事西吉兵衞の讀みて、向井氏の筆錄評論せしものにかゝり、羅馬字より國字に書改めし實例あるを示すと雖も、伊曾保物語に至りては、二者の據りし原本の異なるにやと思はるゝまでに相違し、兩本互に關係なきことを表せり。國字譯書の異板本と譯者に關する問題とは、此物語の文界に與へたる多少の影響と共に別に攷究する所あるべし。（四十三年四月太陽十六卷五號又は斯書附錄の拙稿「西洋文學翻譯の嚆矢」參照。）

エソポのファブラスの漢譯は、文祿に後るゝこと三十餘年、南蠻の宣教師ニコラス・トリゴール（佛國の出）漢名、金尼閣が手に成り、一六二五年、明天啓五年（寛永三年）西安府に於て抄して「況義」と題す。此抄譯本今巴里の一文庫に藏せらるゝか、異日の調査を待たむ。乃

ち茲に和漢兩譯書を對比する能はざるは惜むべし。（前節參照の拙稿に委し。）

伊曾保物語は、西文東移の史上、翻譯の鼻祖として興味深きのみならず、桃山時代の口語資料として價値最も大なり。　予の嚮に大英博物館所藏本より手寫せるもの、遺憾ながら嚴密なる校訂を悉くす能はざりしと雖も、空しく此珍品を筐底に藏するに忍びず、昨四十三年中、雜誌「藝文」に譯載したるを今訂正再刊に附して之を大方に示し、一は以て文學及國語の史料に供し、一は以て異日好書家の原本と校合するの機あるに供へむとす。　南蠻流の綴字にては印刷に不便なるのみならず又讀み難きを以て、之を國字に書改めて印行するに至りしは、遺憾とする所なり。然れども、原本の言葉遣を其儘に表はしたるは勿論、其發音も印

刷上の體裁を損せざる限りに於て、振假名等に於て書表はさむことを勉めたれば、國語資料として研究に供ふるに堪ふべし。

物語の言葉遣は狂言に酷似し、「おりやる」「おりない」又「おぢやる」などを用ゐたるを以て、殊に伊曾保傳中の數節を讀まば、身親しく舞臺に面して狂言を耳にするの感あり。原本には綴字及發音頗る法則に合ひ、又用語も語法も措辭も、譯者相當に意を用ゐたるが如し。すなはち長短開合淸濁等も大抵正確に綴字の上に表はれたれば、之を假名遣の用格に照して其儘容易に書改むるを得たり。間〻定格に違ひたる發音及語法あれども、それらは却て時代の慣用若しくは訛言を知るのたつきとなれば、本文及振假名に於て成るべく細かに之を保存せんことを期せり。

讀者のこの點に意を留められむことを望む。漢字を充つるには萬治二年の刊本にも據り、又古節用集及其他の辭書をも參考したれど、妥當ならざる文字もあるべく、又自ら意に滿たざる宛字多し。洋語の音譯は和樣に由らずして洋流に呼ぶこととし、且つ便宜上片假名を用ゐたり。例へば「伊曾保」「えうらうは」「ひりしや」とせずして、原書葡名のまゝ、エソポ、エウローパ、ブリヂヤとせるが如し。原書に於ても洋語の綴字は日本流にせざればなり。但し原譯兩本に於ける洋名の對照表、本書の末に附錄せり、就きて見るべし。目錄は原本の體裁に從ひて、亦卷末に附することゝし、原書の頁數は本文の中に記入して參照の便に供せり。

文祿舊譯伊曾保物語

エソポのファブラス

(四〇九) エソポが生涯の物語略。

之をマシモ・プラヌーデといふ人希臘の言葉より拉丁に翻譯せられしものなり。

エウローパの内フリヂヤといふ國のトロヤといふ城りの近邊にアモニヤといふ里がおぢやる。其里に名をばエソポというて、異形不思議な人體がおぢやつたが、其時代エウローパの天下に此人に勝つて醜い者もおりなかつたと聞えた。先づ首は

尖り、眼は窄う然も出て、眸の先は平かに、兩の頰は垂れ、頸は歪み、丈は低う、横張りに、脊は屈み、腹は腫れ、垂出て、言葉は吃でおぢやつた。此等の相を以て醜いこと天下無双であつた如く、智慧の長けた者も此人に並ぶことはおりなかつた。

或時主人エソポが上を思はるゝ樣は、「公界の捌き或は内證の取扱ひなどは、如何にも似合ふまじいと見ゆれば、せめて農人の所作をなりとも宛がはうず」と思ひ定め(四一〇)、農具を拵へ與へて、田畠へ遣らるれば、エソポも亦愉快氣に其所作を爲いた。然れば程經て彼の主人其田ばくを見舞に出立たれたれば、或百姓上上の熟柹を持つて來て、主人に捧ぐれば、色香も一段好うて見事にあつたに由て、喜び斜ならなんだ、「只今賞翫せうずれども、風呂

へ入れば、其風呂上りの爲に蓄へ置け」とあつて、傍近う使はる、二人の小姓に預け置かれ、其身は風呂に入られた。然る處にエソポ畠より歸り來れば、彼の柿を預かつた者共思ふ樣は、「よい幸ぢや、いざ彼の柿を兩人して取食うて其咎めのあらうずる時は、口を揃へてエソポにこれを言ひ負せて、此方は空嘯ふいて居て、あれこそ其熟柿をば食べたれと綜けうずるに、何の仔細があらうぞ」と談合して、取つて食した。

偖食しをはつて後、互に目はじきして言ふ樣は「さても無果報なエソポかな、如何樣この祟りがあらうぞ」と私語きまはつた。偖主人風呂から上り、「件の柿を湯上りに持つて來い」と言はるれば、右の二人の者共が犯さぬ顏で申すは、「それをばエソポこそ盜

んで食べてござれ」、其時かの主人は腹に立てし(四一二)こつて、エソポを召寄せ、言はるゝは「いかに畜生な、道でないいたづら者、躬が賞翫せうと思切つて居た其熟柿をば、何と思うて取つて食うたぞ」と氣色を變へて叱らるれば、其時エソポこれを聞いて、分別はしたれども、元來吃りぢやに、又その叱らるゝに肝をつぶいたれば、物言ふことも叶はいで、顏打蹙めてとちめくに由て、主人「さればこそ紛ひもない、彼が取つて喰うたものぢや、それ打擲せい」と言付けらるゝ、程こそあれ、杖棒をおつ取つて二三人程立ちかゝり、忽ち打擲せうとするに臨んで、主人の足元にひれ伏し、吃り吃り謹んで申すは「たとひ御折檻あるとも、今暫く待たせられい、賴み奉る、わが腹中をひるがへいて御目に掛けう」と言ひ様に、微溫

い湯を一杯大茶碗に持つて來て、主人の前で飲み、指を咽喉にさし入れて、吐逆して、その實否を見するに、朝はらのことなれば、吐逆すれども、痰より外は別に吐出さなんだ所で、エソポ主人に向うて言ふ樣は、「それがしは既に此分でござれば、御分別あれかし、さあらば又それがしにこそ讒言を申し掛けた人々にも私が如くに仕れと仰付けられいかし、然らば(四一三)食した人は必ず露顯れまらせうずる」と申せば、其時主人エソポが才幹なことを驚き、彼の二人にエソポが所望の如く言付けらるれば、兩人の者共思ふ樣は、「溫湯をば飲むとも、咽喉に指をさへ入れずは、苦しかるまじい」と思うて、一杯づゝ引受け引受け飲むに、うそ甘い物を喰うた上なれば、何かはよからう、御前に憚るほど吐逆したれば、何の

様もなう化が顯はれた。其時主人エソポをば赦し、彼の二人を裸になし、忽ち打擲させられた。是を以て「血を含んで人に吐けば、先づ其口穢る」といふことは、今こそ思ひ知らせた。

或時エソポが主人旅をせらるゝに及うで、下人どもに荷物を負せらるゝ所に、エソポ荷奉行に言ふは、「某はまだ左様の事に慣れませぬ程に小輕い荷を下されい」というた所で、奉行のいふは、「いや其に及ばぬ、其方は只來ても大事もないぞ」というた。然れどもエソポは「それは然ることでござれども、人並に何ぞ持ちまらせいでは」というたが、其處に兵糧を入れた大きな荷が有つたを、エソポ「之を持たう」といへば、「いや此はあまり重い荷ぞ」と言へども、切に乞受けて持つた。それを何故にと(四一三)いふに、エソ

ポが分別には「此は當時重くとも、やがて輕う成る物ぢや」と思うて、其分にした。案の如く一夜には輕うなり、一朝には又減り、然う〳〵する程に、後には何をも持たいで手打振つて、躍つつ跳ねつして喜うで道を歩いた。それに由て、主人を始めて朋輩もエソポが分別の所を皆譽めたと申す。

其より後に、彼のエソポにいま二人を介添へて、サモといふ處へ行いた。其處にシヤントといふ學匠があつたが、彼の商人に行き向うて、先づ二人の能藝を尋ねらるゝに、兩人共に、「何でもあれ存ぜぬことは無い」と答へた。その時エソポ彼の二人の言ひ樣を大きに嘲けつた所で、シヤント、エソポに問はるゝは、「其方は何とした者ぞ」。エソポがいふは、「吾は人間でござる」。シヤント

怪しうで言はるゝは「汝にそれをば問はぬ、何たる處に生れた者ぞ」。エソポ答へていふは、「母の胎内から」と。シャント又言はるるは、「躬は其所をも問はぬ、其方は何處で生れたぞ」。エソポ答へて申すは、「上に産んだか下に産んだか存せぬ」というて投げのけたれば、其時シャント「其方と問答をするならば、終り果があるまい。(四一四) 先づ其方は何事をば知つたぞ」と言へば、「何事をも存せぬ」といふ所で、シャント又「何故におぬしは何をも知らぬといふぞ」といはるれば、エソポ「件の兩人が悉く存じ盡いたに由つて、私が存ずる爲に何も殘りまらせぬ」と答へた所で、シャント「これは興がつた者ぢや」と心得て、又いはるゝは、「其方を買はうと思ふが、何とあらうぞ」と。エソポが答へていふは、「誰か其事を強ひて勸

むるぞ」と。シャントの言はるゝは、買うてから後に逃げうと思ふが、何と」と。エソポがいふは、「やれ逃げうと思はうずる時は、御邊へ其の御意をば得まじい」。所詮當話に與がる者ぢやに由て、少しの價に買ひ取つて、其邊の關屋の前を通らるゝに、異形不思議な姿を恥ぢて、關守が是を怪しむれば、商人もシャントも二人共に「我が從人ではない」と言はれたれば、其時エソポ「吾には主人がない、自由の身ぢや」というて喜べば、恥をも顧みいで、シャントも商人も「これは我が所從ぢや」といはれた。とかうしてシャント我館にエソポを連れて歸られてあつた。

或時シャント遊覽の爲にエソポを連れて出らるゝに、百姓一人シャントに不審をなすは、「自然に生ずる所の草木は養ひ育つ

ることが無けれども、大に繁昌し、五穀の類は養育すれども、榮ゆる事は少いが、此儀は何と」と。シャント「これは別の仔細ではない、唯天道の自然ぢや」と答へられたれば、其時エソポ「此連の返事は田夫野人の申す儀ぢや」と云へば、「さらば己答へい」とあつて、彼の農人に「我が奴に問へ」といはるれば、農人エソポを見て「あれ程賤しう拙い身で、何として此の返答には及ばうぞ」と大に笑うた。其時エソポが言ふは、「總じて人は外の姿を以て是非をば論せぬものぢや、唯智慧の有無にこそ因らうずれ、先づ唯今の不審は甚容易い儀ぢや、譬喩を以て其方に示さうず、人の習慣には實子をば懇に養へども、繼子をば丁寧にせぬ者ぢや、其如くに自然に生ずる草木は四大の爲には實子ぢや、此に由て人間の養育を借ら

いで生長し生茂る。其外の五穀以下は四大の爲には繼子の意ぢやに由て、養ひを次にする」と、如何にもありありと答へた。

或時シャント、エソポに「わが第一と思はう珍物を買求めて來い」と下知せらるゝに、諸(四一六)人座に列つて居る所へ、獸の舌ばかりを調へて出いた。シャント大に怪めて、エソポを召して「汝は何故に舌ばかりをば買うて來るぞ」と言はるれば、エソポ答へて言ふは、「第一と思はう珍物を買うて參れと仰せらるゝに由て、斯う仕つた、其を何故にと申すに、天下の善惡は舌三寸の囀にあるといふことがござる。然れば天下國家の安否も舌に任することなれば、何かは之に優らうずるぞ」と申した。「然らば又第一の惡しい物を買うて來い」と下知をせらるれば、エソポまた舌ばか

りを買うて來たを、シャント「これは何事ぞ」と怪しめらるれば、「舌は是れ禍の門なりと申す諺がござれば、之に過ぎた惡しい者はござるまじい」と答へたと申す。

或時またシャント、エソポに「風呂に行いて人の多少を見て來い」と遣らるれば、風呂へ行き路次で宿老「汝は何處へ行くぞ」と問ふに、「躬は存ぜぬ」と答へたれば、其人「此は狼藉至極な奴ぢや」というて、既に牢舍に爲さうとする所で、エソポが言ふは「私が只今知らぬと申したことは、斯樣に牢舍せられうことを辨へなんだに由て、知らぬとは答へてござる」というたれば、其處で人々も大に笑うて、赦い（四一七）て遣れば、それからエソポ風呂に行つて見る處に、其風呂屋の前に鋭な石が一つ出てあつたが、出入の人の足を

毀り、傷をつけたを、或人が彼の石を取つて彼所に棄てた所で、エソポ之を見て、立歸つて「風呂には唯一人居まらする」というたれば、乃ちシャント喜うで風呂に入らうと赴かる丶に、人が擧つて、足を履入れうずる所も無かつたに由て、シャント、エソポに怒つていはる丶は、「汝は風呂に唯一人あるというたが、この群集は、常よりも多いは何事ぞ」と。　エソポ「此風呂屋の入口に尖つた石があつて、出入の人の仇となつたを、誰も取棄ていで、人毎に躓き倒るれども顧みなんだを、或人一人來て取つて棄ててござれば、智分の程の唯一人な事を申した」と、答へておぢやる。

或時シャント沈醉して居らる丶所へ、人が來て「大海の潮を一口に飲み盡さる丶道があらうか」と問ふに、シャント「容易う飲ま

うずる」と領掌をせられたとき、其人のいふは「若し飲み盡させられずは何と」と。　シャント「必ず明日飲まうず、若又飲み損ずるに於ては、一家の財寶を盡く賂ひに進ぜうず」といへば、相手も其分約束して、互に(四一八)指金を取換いた。　其人が歸去つて、酒醒めて後、エソポを招寄せ、「躬が指金は何處にあるぞ」と問はるれば、エソポがいふは「今日迄は此家の御主なれども、明日は何とならせられうか」というて、先の爭ひを語つたれば、シャントは大に驚いて、「偖何とせうぞ、偏に汝に任するぞ、此事を何卒計略して見よ」といはれたれば、エソポがいふは、「吾此難儀を逃れさせられうずる事を敎へまらせうず、然らば我身を自由に爲させられい」と。　シャント「其段は甚容易い事ぢや」と約束して、謀をエソポに敎へられ、



（伊曾保物語萬治版本插繪）

翌日海邊に出て、大海を飲まうと爭ふ程に、見物の貴賤海の邊に市を爲いた。其時シャント器物に潮を汲んで、高座に上つて言ふは、「吾昨日の約束の如く、海の水を悉く飲み盡さうず、然れども先づ諸の川の流れを堰留められい、其後海を悉く飲まうずる」というたれば、其時爭うた人は問訊して、シャントの足元にひれ伏し、「是非に及ばぬ聊爾を申した、右の懸物をば御赦免あれ」と頼むに由て、其處に馳集つた萬民も、共に「赦されい」と乞ひ受くるに由て、乃ち赦免せられた。

或時シャント、エソポを連れて墓處へ赴かるゝに、其處に棺のあつたに、七つの文字を刻うだ。其といふは、よ。た。あ。ほ。み。こ。お。これぢや。エソポ、シャントにいふは、「殿は學者でござれば、此文字

をば何と辨へさせらるゝぞ」と。シャント暫く工夫をせらるれども、更に辨へられいで、「此棺は上古に作つたれば、文字今は辨へ難い、汝知らば言へ」といはれて、エソポは元より其字面を能う心得て、シャントにいふは、「吾は此謂れを辨へてござる、此處に過分の財寶がござる。其を顯しなしたらば、何たる御恩賞にか與らうぞ」と。シャント此旨を聞いて、「汝これを顯すに於ては、譜代の所を赦免して、其上に財寶半分を與へうずる」と約束せられた。其時エソポ文字の謂れを讀み顯いて申すは、「よ。といふは四つといふことぢや、た。といふはたんとといふこと、あ。とはあがらうずるといふ義、ほ。といふは掘れといふこと、み。とは見よといふ義、こ。とは黄金といふ義、お。といふは置くといふ義ぢや」と判ずれば、掘

つて見るに、文字の如く過分の黄金が見えた。　シャント之を見て、貪欲が俄に起つて、エソポ（四二〇）に約束を違へうとせられたれば、又其奥な石に五つの文字があつたを、エソポが見ていふは、「所詮この黄金をばシャントも取らせられな、其故は此處に又石に五字書いてござる、其といふはお。こ。み。て。わ。とあつた、此意は、お。といふは置くといふ義、こ。といふは黄金といふ義、み。とは見付くるといふ義、て。といふは帝王といふ義、わ。といふは渡し奉れといふ義でござる、然れば此寶を國王に捧げうずるものぢや」と言うた所で、シャント大に驚いて、竊にエソポを近づけ、「此事が外へ聞えぬ様にせい、家に歸つて其配分をば與へうず」とばかり言はるれば、エソポ譜代の免しの取沙汰は無かつたに由て、シャントに向

うていふは、「此金を下さるゝことは恩に似て恩でない、仔細はさう無うて叶はぬことぢや、右の約束の如く譜代の所を赦させられいでは、曲がない、假令當時は種々に仰せらるゝとも、時刻を以て是非に本望を達せうずる」と申した。

或時シャントを知音の許へ請待したに、其座でシャント妻のことを思出し、エソポを召寄せ、座敷にあつた珍物を取揃へて、「此は孰れも賞翫の者ぢや程に、持つ(四二)て行て、我が祕藏大切にする者に食させい」と言ひたれば、エソポ之を聞き、女房のことを言はるゝとは分別したれども、彼人のエソポに當り樣が惡うて、賤めらるゝに由て、何處でがな返報をせうと思ひ居る時分であつたに由て、「をりに幸ぢや、今彼時返報せいでは、何れの時日を待た

うぞ」と思ひ、空惚して彼雑餉を持つてシャントの家に歸り、シャントの如何にも祕藏せらるゝ小犬があつたを女中の前に召出し、彼雑餉を其犬に供へて「食はせば唯も食はせいかし」「いかにも善う聞け、汝をシャントの深う大切に思はせらるゝことは雙ぶことがないぞ、其證據はこれぞ」というて食はせ、軈て馳歸り、シャントに向うて「仰の如くに仕つた」と返事をした所で、シャント言はるゝは「偖それを受取つてから、何ともそれは言はなんだか」と問はるれば、「何をも申すことがござなかつたれども、心の中には一段と深い御大切の程を喜ぶ體が見えてござつた」と申した。偖其後に女中は此事を熟と案じて、嫉の心が起り「さても曲もない我夫かな、犬にも妾を思ひ代へらるゝかな、彼珍物をば妾にこ

そ贈られうことが本義(四二二)ぢやに、然は無うて、何ぞよ今の犬に與れやうは、此樣な人を今は夫と賴うでも何にせうぞ、取つて退いて此恨を思知らせうずるものを」と思ふ意が附いた。然ある所へシャント歸宅して、女中に向うて例の如く言葉を掛けらるれども、かつて女房は返事も及ばず噤んで居たが、腹こそ立つつらう、「いかにシャントお聞きあれ、其方と妾は緣こそ盡きつらう、今よりしては夫とも賴みまらすまい、又妻とも思はせらるゝな、妾に當る財寶をば暇として賜うれ、わが代りは嚮に雜餉を贈りあつた犬から寵愛せられさせられい」といふに由て、其時シャント此事を聞いて肝を消し、「これは何事ぞ、さても心得ぬ事かな、此は定めて例のエソポが仕業に由て斯の如くぢや」と思ひ、女中に

言はるゝは、「いかに妻、たゞし御身も吾も醉狂か、夢とも現とも覺えぬものかな、嚮の雜餉をば其方にこそ贈つたれ、別には誰にも遣らぬものを」と言はるれども、女房衆は之を眞實に受けいで、「それは今こそ然仰せらるゝとも、一圓其分では無かつた、唯犬にこそ」と言ふに由て、エソポを召寄せ、「先の贈物をば誰に與へたぞ」と問はるれば、エ（四二三）ソポ居直り、申すは、「それは此方の御大切に思はせらるゝ者に渡いてござる」と答へ、犬を召うで、「これこそ御身を大切に思ふ者なれ、何故にといふに女は夫を大切に思ふと雖も眞實ではござない、其に由て少も氣逆の事があれば、口答をし、腹を立て身の焰を燃いて、誹りまはつて、猶足んぬせねば、取つて退いて、其方は其方、此方は此方と振舞ふものぢや、然りながら犬

は打つても敲いても口答もせず、誹らず、取つて退くこともござらず、軈て立直らば、尾を振り、足元に來て舐り附き、被り附きして、主人の氣を攬るものでござる程に、大切な者と仰せらるゝは平生御祕藏なさるゝ此犬のことでござらうずると存じて、先の物を渡いたは、某が僻事でござるか、其のうへ上樣へ遣はさるゝならば、明かに上樣へと仰せられいで、唯我が大切に思ふ者と仰せられたに由て、斯の如く仕つた」と申した。其時シヤント妻に向うて、「然ればこそお聞きあれ、我が過失では無かつたわ、唯使ひをした者の聞違へであつた、又聞違へならば、折檻するにも及ばぬことぢや、兎角理を曲げて堪忍めされい」と(四二四)いへども、少も承引せいで、けんもほろゝに言放いて、親類の許へ行つて退けた。

そこでエソポ、シヤントに言ふは、「善うこそ嚮は申したれ、御覽せられい、犬は棄てまじいけれども、上樣は棄てさせられて此分にござる」と言うたれども、シヤントはえ思ひ切らいで、親類を賴うで、「再び歸りあつたれい」と妻を賴まるれども、此にも同心せねば、シヤントは思の餘りに既に氣を煩はせらるゝ樣にあつたに由て、其處でエソポが申すは、「少も御氣遣あられそ、容易うお仲を直しまらせうずる」と言うて、其手段を企圖んだ。其といふは、先シヤントに銀子を乞うて、街辻を廻つて買物をしたが、彼妻の籠り居られた家の邊へ行つて「此許に雁や鴨はないか、買はうず」というて、どしめくに由て其女房の親類これを見て、「何事なれば、けしからぬ肴道具を買合ふぞ」と怪むれば、エソポが言ふは、「いや偖は

未だ御存じないか、某が賴うだ人は此頃夫婦諍ひをめされたに由て、女房衆の取つてお退きあつたを種々に詫びらるれども、遂にお聞きあらぬに由て、今は早爲方ない、世に女房は彼ばかりか、餘の妻を迎へうというて、既に嫁入が今明日の中にある(四二五)、然るに由てこそ此肴をも調へ歩け」と眞しやかに言ふに由て、彼人家に走り歸つて、云々と語れば、女房これを聞いて、「實にそれは然ぞあらう、斯うして居るさへ腹の立つに、我眼の前で別の妻などを持たせては、あられうものか、兎角餘の女房をシャントの家へ入れられてはなるまい、唯行け」と言ひ樣に、取る物も取敢へず、走りぢだめいて家に歸り、「いかにシャント、妾がまだ生きて居る間に別の妻をば何としてお持ちあらうぞ、思ひも寄らぬ事ぢや、

叶ふまじい」と言うて其時に及うで人も直さぬ仲を直された。エソポが仕業を以て仲を違はれた如く、又エソポが工を以て仲直りをせられた。

或時又サモと云ふ處に大法會の儀があつて、高いも卑しいも群集する。其場に處の檢役が坐せられたに、鷲ひとつ飛んで來て、彼の守護の指金を銜んで、何方とも知らず、飛去つた所で、其座に有合うた萬民之を怪み、「これは只事ではない」と言うて、法會の儀式も興醒めて、各〻この事を詮議するのみであつた。地下の宿老若輩の者まで「此儀はシャントより外に知る人があるまじい」と言うて其旨を相(四二六)尋ぬれば、「此事は淺からぬ不審ぢやほどに、思案をして答へうずる」というて家に歸り、心を盡いて案ずれ

ども、更に辨ふる道が無かつたに由て、案じ煩うて居らるゝ體を、エソポ見てシャントに問ふは、「何事を案じさせられて、悲しませらるゝぞ」と言へば、シャント「吾この程案じ煩ふ事はこれぢや」とあつて、彼一返を語つて、「汝これを辨へたか」と言はるれば、エソポ「然らば此里の會所で我郎等この事を辨へたれば、召出いてお問ひあれと仰せられい、某申し當たならば、諸人御身を崇敬いたさうず、若し申し損ずるとも、私一人の不覺でこそござらうずれ」と言へば、「此儀尤ぢや」とあつて、シャント處の人々に其分申さるれば、各大きに喜うで、エソポを召出すに、其座に連る程の人「さても此程醜い者は何處から出たぞ」と笑ひ合うたれば、エソポ少も臆した氣色も無う、諸人の中を怖めず憚らず、踏越え踏越え、指通つ

て、高座に直り、「唯今おの〳〵私をあざむかせらる、事は其謂れがない、破れた衣裳を著た君子もあり、藁家の内に貴人の坐せらる、事もあるもの」と云へば、おの〳〵「道理(四二七)ぢや」というて物言ふ者も無かつた。其時エソポ「唯今それがし鷲の仔細を申さうとすれども、人の下人として、主君の前で自由に物申すことも憚りなれば、此座に我主シャントのござることなれば、恣に申されぬ、唯今わが譜代の所を赦免あらば、其因縁を談ぜうずる」というた。然れどもシャント少も同心なうて、「かつて有るまじい事ぢや」と蜂を拂はれたれども、處の守護強ちに赦免を乞はる、に由て、力に及ばいで、萬民の前で「今日よりはエソポに暇を取する」と言はれた。其時エソポ「只今の音聲は速に諸人の耳に落ち難

い」というて、別人を以てシャントの言葉の如くに高聲に叫ばせ、偖其後山呼を鎮めさせて、鷲の仔細を述べた。「彼鷲守護の指金を奪取ることは餘の儀ではない、鷲は諸鳥の王ぢや、他の國の帝王から此里を押領せられ、其勅命の下にならうずると云ふ儀ぢや」というて、去つた。其よりリヂヤの國のクレッソと申す帝王より勅使を立てられ、「其里から歳毎に管分の貢物を捧げ奉れ、此勅諚を背かば、盡くを攻取られうずる」と(四二八)の儀であつた。此に由て處の人々「此勅諚を背くまじい」と口を揃へて、同音に議定事終つてあつた。然れども、年長けた人々は「先づエソポに談合してお返事を申さうずる」とあつて、「如何」と問へば、エソポ答へて云ふは、「一切人間のナッラの教には、自由を得うことも、又は人

に使はれうことも、其身の分別にある事なれば、只今それがし孰を採らせられいとは申すに及ばぬ、兎も角も總並に任させられい」と申した。其處で處の人々エソポに智慧を附けられ、各その分別を爲いて、「貢物を捧げうことは其謂れが無い」というて、勅諚を背くに由て、勅使歸つて此由を奏し、「唯義兵を以て攻めさせられうことも難からうず、其仔細は彼處にエソポといふ學者が一人居住仕る、之を召されぬ程ならば、容易う攻伏せられうことは難うござらうず」と申せば、重ねて勅使を立てさせられて、「其處に居住するエソポを參らせい、然らば貢物を免させられうず、エソポを參らせぬならば、大軍を以て攻めさせられうずる」と仰せられた。其時その里の人々は先づ其難を免れうとて、エソポを奉

らうずる（四二九）との談合半であつた所に、先づ其身に如何と問へば、譬喩を述べていふは、「昔し鳥獸の物を言うた時、狼羊を喰はうとすれば、羊は其難を免れうとて、犬を傭うて警固させた、其時狼が心に思ふ樣は、武略を以て誑さうには若くまじいと、羊に向うて云ふは、面々の傍に置かれた犬共を渡し與へらる、ならば、今より以後汝等に害を爲すことはあるまじいぞと、羊は之を眞實かと心得て、乃ち犬を渡し遣れば、其時狼もとより企んだ事なれば、先づ犬共を生害して、其後羊を喰ひ果いた」と言終つて、彼勅使と連れてリヂャの國へ赴いた。

エソポ程なうリヂャの國に罷り著き、クレッソの御前に伺候致せば、國王エソポを叡覽あつて、偖も斯る見苦しい奴が所爲を

以て、サモの者共我命を背いたかと、大に怒らせられたれば、其時エソポ叡慮を察して、謹んで「如何に帝王の中の帝王にてござる御身、少のお暇を下されば、奏聞申さうずる事がござる」と申せば、乃ちお許しを下された。　其時エソポが述ぶると（四三〇）ころの譬喩には、「或貧者螽を捕らうずると行く路次に於て蟬を見付け、乃ち之を捕つて殺さうとする所で、彼蟬の申すやうは、然りとては吾を殺させられう事本意ない儀ぢや、其を何故にと申すに、五穀草木に障りとは成らず、さしては人にも仇を爲す事はござない、結句梢に上つて囀りを以て夏の暑さを慰めまらする所に、理不盡に殺させらるゝ事は何事ぞと事を分けて申せば、其者道理に責められて、忽ち赦免致いた、然らば古の蟬と唯今の某は少も隔

がござない、私は總じて人に仇を仕らず、唯道理の推す所を人に致ふるばかりでござる、道理を守る時は、天下も太平に、國土も安う穏かに、民の竈も賑はふことは常の法でござる、私は斯道を致ふるより外、別の犯しもござない、お許しなされば、國里を普く徘徊致さうずる」と奏すれば、國王この奏聞を感じさせられて、「汝に科が無い、天道も之を宥させらるれば、朕も亦赦免するぞ、其外所望あらば申上げい」と仰せらるれば、「某別の願もござない、唯一つ（四三一）の望がござる、其と申すは、我が久しう居住仕つたサモに於て、人の被官となつて色々の辛勞を仕る所に、其里の人々暇を乞受けて自由を得させられたれば、爭か之を報謝つかまつる志が無うてはござらうぞ、仰ぎ願くは彼處へ仰せかけられた貢物を

免させられば、比類もない御恩でござらうずる」と奏すれば、帝王其優しい志を感じさせられて、「御赦免なさるゝ」と仰せられたれば、其から一卷の書を作つて帝へ之を奉つたれば、叡感斜ならいで、過分の財寶にサモの御宥の綸旨を添へて下されたれば、エソポ之を戴いて夥しい船を飾り立て、之に乘つてサモへ渡海すれば、サモの萬民この由を聞き、上下萬民喜び身に餘り、足の踐所も覺えいで馳走奔走をして、結構に船を飾り、舞樂を奏し、絲竹を調べ、宗徒の老若迎ひに出て、彼のエソポを欵待いた。さて此船ども湊に著けば、宮殿樓閣を飾置いた高い臺に登つて言ふは、「抑も其御恩賞の忝なさを、いつの世に忘れうぞ、其御恩を報せう爲に(四三二)、此度リヂヤの國王の勅札を茲に持つて參つた」と云うて、綸

旨を披いて高らかに讀めば、其處の守護を始として、老若男女喜びの眉を開き、安堵した有樣は、眞に譬を取るに例もない程にあつたと申す。

其後エソポ諸國へ渡り、道を說き敎ふれば、バビロニヤといふ大國のリセロと申す帝王、このエソポを寵愛あつて、辱くも御身近う召置かせられた。其頃諸國の帝王より互に不審の勅札を送り、其不審を開かねば有程の寶を奉らるゝ形氣が御座つた。然ればバビロニヤへ諸國から懸くる不審をばエソポが智略を以て容易う開いて遣り、バビロニヤから掛けらるゝ不審をば他國から開くことが稀にあつたと聞えた。然あればバビロニヤは元より大國といひ、智略といひ、國の勢も他に異にあつて、國も

福有に、民も豐かに、帝王の譽れも四海に仰がれさせらるれば、エソポも亦官位に進むることも斜ならなんだ。然れどもエソポまだ子孫を有たなんだに由て、エンノといふ官人の子を養子と定めて、軈てこの由を申上げ、其身の總(四三三)領と披露した。或時エンノ罪を犯すことがあつた所で、「若し此事をエソポが知らば、定めて奏聞申さうず、其時は悔ゆるとも甲斐があるまじい」と思うて、謀を爲いて謀書を造り、「エソポ此頃野心を企て、他國へ移り、此國を傾けうと仕る」と國王へ奏した。然れども帝王この由を聞かせられて、實否を未だ決しさせられなんだれば、豫てエンノ工み置いた事ぢやに由て、「此處に證跡がある」と申して、一つの卷物を捧げた。帝王之を御覽せられて、「今は疑ふ所も無い」と仰せ

られて、エルミッポといふ臣下に仰付けられて、罪科に行へとの儀であつた。エルミッポ乃ちエソポを召縛めて、心中に思はるるは、「さても世上に名を得た此學者を殺さうことは本意ない、所詮身に罪を被るといふとも、命を繼がうずる」と思定め、竊に或片側な棺に納れて置き、「既に誅伐仕つた」と奏聞せられてあつた。偖彼エソポが跡式をば論ずる者も無う、彼養子が之を進退致いた。偖エソポは死去した由が、隣國は申すに及ばず、遠い國までも隱れが無かつた所で、エヂットの國のネテナボと申す帝王エソポが逝去し(四三四)たといふことを聞かせられ、然るに於ては、不審を掛けられうずるとあつて、不審の條々を書送られた。其趣は、「今朕天にも地にも附かぬ宮殿樓閣を一つ建立せうとの望

ぢや、願くは其國から作者一人を遣はされ、不審の樣をも開かせたらば、何の幸か之に若かうぞ、此事が成就致さば、これより每年寶の車を贈らうず、然ないものならば、其方より每年寶を給はれ」と書かれた。然ある所でリセロ此不審を聞かせられて、國中の學者宿老どもを召寄せられ、此事を如何にと問はせられれども、一人として明らめ申す者が無かつたに由て、帝王御心を惱ませられ、歎いて仰せらるゝは、國を亡ぼし、家を破ることは人を失へばとある辭、今身の上に知られた、何たる天魔波旬が我心に入代つて、彼のエソポを害したか、賢王は勝れたる臣下の亡ぶることをば、手足を挽がるゝ如くに惜がるとあるも、此等の事であらうず、エソポさへもあるならば、此不審を容易う開き、我が譽れをも

輝かし、國の智略をも揚げうずるに、悔ゆるに甲斐ない越度をした」と、御涙を流させらるれば、エルミッポ此よ(四三五)しを見奉り、「如何に君、彼のエッポを成敗いたせと宣旨を下された時、餘り本意なさに、或棺に納れ置いて御座れば、まだ存命仕ることもあらうずる」と奏すれば、帝王大に感じ喜ばせられて、エルミッポに取附かせられ、「爾朕に王業を再興した、偏に此國の代を治め、民を撫づることは、爾が分別に殘つた」と仰せられて、喜びのお涙を流させられ、「急ぎエッポを召寄せい」と仰せらるゝに由て、エッポ再び死せいで蘇生仕り、參内致すは不思議ぢや。固より數月棺の内に籠り居たことなれば、姿も衰へ、衣冠も窶れて、最ど其樣は見苦しうなつた所で、國王この姿を御覽なされて、「衣冠を更め、罷出よ」と

仰せらるゝに由て、如何にも束帯ちぎつて罷出れば、則ち彼のエヂットよりの勅札を見せさせられた。エソポ之を披見して、暫く案じて申したは、「これは更に六ケ敷い不審でも御座ない、冬過ぎて其造營の爲に、作者をも遣はし、又は不審の條々をも開いてもつて參らうずると仰せ返されい」と奏すれば、則ち其返事をさせられたと申す。

(四三六) エソポのエヂットよりの不審の條々

エソポ國王に奏するは、「グリホと云ふ大きな鳥を四つ生擒つて、彼鳥の足に籠を結付け、其籠に童を入置き、鳥の餌を持たせ差上げば、鳥も上に上り、下げば鳥も亦下る樣に習はせて、彼の四つ

の鳥の上に其造營を致さうずる」と云うて、エソポはエヂットに赴いた。彼國の人どもエソポを見て、笑ひ嘲ることは限が無かつたれども、エソポは之を物ともせず、內裏に參つて、國王を禮拜して畏つたを、國王御覽ぜられて「さて高樓の作者は何と」と問はせらるれば、「各々召具して御座る、孰れの處に建立仕らうぞ」と奏すれば、處を指いて敎へさせられた所で、國土の貴賤上下見物せうと出立つこと限も無うて、剩さへ帝王后妃までも車を立並べて、此處を先途と見物させられたに、エソポは豫て工んだ事なれば、件のグリホを四處に置いた。其時帝王「作者は誰ぞ」と問はせらるれば、籠の內な童がまゐつて、一方の鳥の餌を持ち、ま一方にはこ(四三七)れを取つて彼鳥の餌を差上げたれば、彼鳥遙に飛上つ

た時、童「何處の程に、彼の御造營をばあらうぞ」と云へば、「其邊に建てい」と仰せらるれば、童答へて申すは、「然らば石と土とを運ばせられい」と云へば、上一人より下萬民返事に詰つて、物言ふ者も無かつたに由て、エソポが才智の程を大に譽められ、帝王も臣下も、其外下々の者どもも、此人を師とせずは、誰人か師にせうずと感じ合はれたと申す。

エソポ養子に教訓の條々

子に向うて申すは、「汝確に此儀を聞いて耳に挾め。人に善い理を教ふるとも、其身に守らずは、木賊の物を滑かに磨いて、己は粗相な如くぢや。又天道の私ないことを鑑み、萬事を謹み、天に

跼り、地に蹐する心を持て。人は萬物の靈長であるぞ。それに由て人と萬物の差別を置かずは、鳥類畜類に同前ぢや。此樣な者には天罰遠うはあるまじい。萬事について難儀難堪(四三八)出來せうず。それを心から堪忍せい、其堪忍を以て萬事悉く意に叶はうず。親しいをも疎いをも分たず、平等に笑顔を人に現はせ。妻に心を縱すな。平生意見を加へい。總別女は弱いに由て、惡にはあり易う、善には到り難いぞ。慳貪放逸な者を友にすな。惡人の威勢富貴を羨むな。道理の上からでない時は富貴は却て成下る基ぞ。わが言はうずる辭を押止めて、他人の言ふことを聽け。言語に邪なかれといふ轡を常に銜め。濫りがはしう物をいふことを本とする處では、尚その嗜みに忽をすな。

善い道を修せうずるには、人口外聞を憚るな。學問をせいで心の至るといふ事はないことぞ。われより下の人に崇敬せられうよりも、上たる人に諫めらる、ことを喜うで交りをなせ。大事を妻に洩すな。女は智慧淺う、無遠慮なに由て、他に洩らいて、仇となるぞ。凡下の者を賤め侮るな、却て憐憫を加へい。是は即ち天のお憐みを蒙る道ぞ。萬事を力め行はぬ前に、心を盡いて思慮を加へい。極惡の人に意見をなすな。病眼の(四三九)爲には日の光が却て仇になるぞ。病者は良藥を服して癒え、凡人は意見を受けて善人とも成るぞ」。

ネテナボ帝王エソポに御不審の條々

「グレシャの國から數多の雜役を曳寄せたが、バビロニャの國に駒が嘶えば、必ず此國の雜役が孕むことがある、其意は何と」と問はせらるれば、エソポ「此當話をば明日言上仕らうずる」とて、わが宿に歸り、エソポ其夜家の猫を散々に打擲せられた所で、エヂットの國はゼンチョで猫を崇敬するに由て、旅宿の亭主が此由を奏聞すれば叡慮を惱まされ、エソポを召して「汝は何故に猫を打擲するぞ」と問はせらるれば、エソポ申すは、「バビロニャの禁中の鷄を此猫が夜前喰ひ殺いたに由て、不肖ながらも某はリセロ帝王の臣下一分で御座れば、打擲つかまつゝた」と申せば、エヂットの帝王聞かせられて、「遙の境なバビロニャへ何として此猫が一夜の中に往來をせうぞ」と(四四〇)仰せらるれば、「御厩に召置かれ

た雜役がバビロニヤの駒の嘶ふを聞いて孕うで御座る如く、彼猫も往返仕つた」と奏すれば、「奇特な當話ぢや」とあつて感じさせられたと申す。

斯くてエヂットの帝王國家の學匠を召して、「エソポに不審をなせ」と仰せ下さる、に由て、或學匠一人進み出でて問ふは、「大伽藍の中に柱唯一本あつて、其上に十二の在所がある、其在所の棟木は三十ぢやに、此柱から二人の女房昇つつ降つつするは、何とした事ぞ」と云へば、エソポ答へて云ふは、「此等の不審は吾等が國には女子兒童などの口遊でござる、先づ大伽藍とは世界のことなり、一本の柱とは一年のこと、十二の在所とは、十二月のこと、三十の棟木とは三十日のこと、柱から二人の女が昇り降りすると

いふは晝夜のことよ」と目算も無う、さつと云うて出いた。

又一同に各々懸くる不審には、「天地創まつてから此方、まだ見聞かぬものは何ぞ」。エソポが申すは、「某唯今家に歸らうず、其暇を下されい」と申し、家に歸り、エソポ一紙を調へて帝王へたてま(四四)つゝた。其ことわりはリセロ帝王から借らせられた三十萬貫の借狀であつた。帝王之を御覽ぜられて、大に驚かせらるる體で、諸臣下に「汝等は此儀を見聞いたことがあるか」と問はせらるれば、おの／＼「かつて以て見聞かぬ事で御座る」と申せば、其時エソポ「然らば唯今の御不審は其を以て開けてござる」と申して、エソポは暇を請うて罷歸れば、其身にも數多の寶を下された。エソポ之を請取つて、バビロニヤへ歸り著いて、エヂットからの

寶の車を奉り、彼國での事等を精しう奏聞すれば、斜ならず喜ばせられた。其後エソポ、バビロニヤの帝王に暇を申し、諸國修行と志いて、先づグレシヤの國に行いて諸人に道を教へ、同じく其國の内なデルホスと云ふ島へ渡り、教化すると雖も、此島の人惡逆無道にして、是非善惡も聞入れなんだれば、彼島を出るに臨うで、島中の惡人等僉議して云ふは、「エソポは聞ゆる學匠ぢやに、此處を去つて吾等が惡名を言はば、此島の瑕瑾であらうず、唯殺せ」と云うて、エソポが荷物の中に(四四二)黄金を入れて置き、路次で追掛け、荷物の中から此黄金を探出し、盗人と言掛けて即ち牢舍させ、終にはエソポを山上に連れて行けば、最後と心得て譬を述べて云うたは、「諸の蟲どもが無事に參會をした時、別して鼠と蛙い

かにも親しう言合はせた。或時鼠の許に蛙を招いて、種々の珍物を揃へて饗應いた所で、其後又蛙も鼠を饗應さうずるとて招寄せ、河の邊に出て云ふは、わが私宅は此邊ぢや、定めて案内を知らせられまじい、とて鼠の足に繩を附けて、蛙水の中に飛入つたれば、鼠も引入れられ、命の終と思うて云うたは、さても蛙は情も無う吾を謀り、命を絶つものかな、吾こそ水屑と成果つるとも、後に殘る一族等、いかでか汝を安穩に置かうぞと、互に浮いつ沈うづする所に、鳶といふ猛惡人、此こそ究竟の所望なれと云うて、宙に摑うで飛上り、二つ共に裂き食はれた。其の如く我が唯今の有樣は、彼鼠に少しも劣らぬ、吾面々に珍物の如くな道を敎ふれども、其返報には命を失はるゝ、吾こ(四四三)そ空しう果つるとも、バ

ピロニヤ、エヂットの人々吾を深う愛せらるれば、此儀は唯は沙汰されまいぞ」と言終れば、高い處から突落いて、殺いて除けた。

其後エソポが申したに違はず、此事がグレシヤに隱れが無かつたに由て、其國から人數を率し、デルホスへ渡つて其事を糺し、皆討果いて除けられたと申す。

エソポが作物語の抜書

狼と羊の譬喩の事

或川端に狼も羊も水を飲むに、狼は川上に居、羊の兒は川裾に居た所で、彼狼この羊を食はばやと思ひ、羊の側に近づいて云ふは、「其方は何故に水を濁らいて我口をば汚いたぞ」と怒つたれば、羊の云ふは、「吾は水裾に居たれば、何故に川の上をば濁さうぞ」と。重ねて狼の云ふは、「汝が母六个月前にも水を濁らしたれば、如何でか其罪を汝は遁れうぞ」。羊の云ふは「そ(四四四)の時は未生以前の事なれば、更に其罪吾に當らぬ」。又狼より云ふは、「汝また躬が野山の草を食うた、是亦重犯なれば、何故に逃さうぞ」。羊答へて

云ふは「吾はまだ歳にも足らぬ若輩で御座れば、草を食むこともまだ御座ない」と。重ねて狼「汝は何故に雜言するぞ」と大に怒つたれば、羊の云ふは「吾は更に惡口を申さぬ、唯科の無い謂れを申すばかりぢや」と。其時狼「所詮問答は無益ぢや何であらうとも儘よ、是非に汝をば吾が夕飯にせうずる」と云うた。之を何ぞといふに、道理をそだてぬ惡人に對しては、善人の道理と其の謙遜も役に立たず、唯權柄ばかりを用ようずる義ぢや。

犬と羊の事

或犬羊にいふは「汝に負せた小麥一石急いで返せ」と催促したれども、羊この事を夢にも知らぬことなれば、「兎に角に檢斷の前

に出て言開かうずる」といへば、犬の云ふは、「其證據は歴々ぢや」と云うて、おのれが一味の狼と、鳶と、鴉を傭ひ、検問の前に出た。時に狼、糺者に（四四五）向うていふは、「この羊犬の小麥を請負うたこと必定ぢや」。鳶亦進出ていふは、「何故に羊は借物を負はぬとはいふぞ」と責むれば、鴉もまた「わが前で借つたをば存じた」といふ所で、検斷これを聞いて、「この上は糺明に及ばぬ、羊急いで返辨せい」と一決したに出て、羊力におよばず、小麥を持たねば、身の毛を鋏うで遣つた。

下心

人に仇をなしたがる悪人は、權柄を本として、道理に似た假託を求むることは、常の事ぢやといふことぢや。

犬が肉を銜んだ事

或犬肉叢を銜んで河を渡るに、その河の眞中で銜んだ肉むらの影が水の底に映つたを見れば、己がふくんだよりも一倍大きなれば、影とは知らいで、銜んだを棄てて水の底へ頭を入れて見れば、本體が無いに由て、すなはち消失せて、何方をも取外いて失墜をした。

（四四六）下心

貪欲に引かれ、不定なことに頼を掛けて、わが手に持つた物を取外すなといふことぢや。

獅子と犬と狼と豹との事

此四疋が同心して山中を駈廻るに、獸一疋ゆき逢うたれば、喰ひ殺いて、その四足を四に分けて配らうとするに、獅子の云うたは、「吾は有程の獸の王なれば、肢一つは王位の德に供へい、又われ勢も汝等に比せうずる者でなければ、其威德分にま一肢はわれに與れい、又躬は汝等より速う走ることは電光の如くにして、之を留めたれば、其辛勞分に又一肢をばわれに與れい、相殘るま一つの肢にも手を掛けうずる者は即ちわが敵であらうずる」と云ふに由て、殘る三疋の獸は力に及ばず、無體に獅子に奪取られて、すご〳〵と歸つた。

下心

人は只われに等しい人を伴はうことぢや。それを如何にと

いふに、威勢の盛な貴人を友にすれば、必ず其得分も樂も、其威勢のある人に奪取らるゝものぢや。

(四四七) 鶴と狼の事

或時おほかめ喉に大きな骨を刺てて迷惑こゝに窮つて、鶴の側へ行つて、「この難儀を救ひお助けあらうお方は、其方より外はあるまじい、此難をお助けあらば、水と魚の如く親みまらせう、そのうへ生々世々その恩を忘却仕ることはあるまじい」といふに由て、鶴この由を見て、憐に思ひ、「さらば口をお開きあれ」というて、嘴を差入れて、骨をくはへて引出し、「右の約束を變ずるな」といへば、狼これを聞いて大きに怒り、「おのれは何事をいふぞ、われこそ

恩を與へたれ、唯今汝が首を食切らうずるも、わが儘であつたれども、差措いて助けたことをば恩と思はぬか」といへば、鶴は無益の辛勞をして立去つておぢやる。

下心

恩をも知らぬ惡人に恩を施さうずる時は、偏に天道へ對してめされい。

鼠の事

京の鼠田舍へ赴いたが、その處の鼠の許で、都の鼠をも（四四八）てなすことが限が無かつた。さて京のねずみ其恩を報ぜうずるとて、同道して都へ上つた。京の鼠の家は所司代の館で、しかも

倉の内なれば、七珍萬寶其外美い酒、佳い肴、なんでもあれかし乏しいことは一つも無うて、酒宴の半に及うだ時、倉の役者戸を開いて來れば、京の鼠は素から住馴れたる處ぢやに由て、わが住處を善う知つて、容易う隱れたれども、田舍の鼠は案内は知らず、此處彼處を逃廻つたが、とある物の蔭に隱れて、辛い命を生きて、其難を逃れた。さて其役者出てゆけば、又ねずみども參會して、田舍のねずみに云ふ樣は、「すこしも驚かせらるゝな、在京の得といふは、この樣な珍物、美物を食うて、常に樂しむぞ、恣になにをもかをもお參りやれ」と云へば、田舍のねずみが云ふは、「面々は此倉を案内を良うお知りあつたれば、さもあらうず、吾等はこの樂も更に望がない、それを何故にといふに、此の館の人々各を憎むによ

つて、萬の罠、鼠捕を拵へて置き、剰さへ數十疋の猫を養へば、十に八九ほどは滅亡に近い、吾等は田舍の者(四四九)なれば、自然も人に行逢へば、藁芥の中に逃入つて、匿るゝにも心安い」というて、速に暇乞して馳下つた。

下心

凡夫は貴人、高家の側に近づくことは無益ぢや。若し其顧慮が無くは、忽ち氣に逹ひ、禍に遭はうずれば、唯貧樂には若かぬ。其仔細は、貧を樂む者は外には樂は少いと雖も、心中には萬の寶を持つに由て、心安う樂むことは窮ない、就中貧に伴ふ堪忍謙遜の寶を以て飾にするものぢや、然るに有德な者は常に心亂れ騷いで、驕慢身をも心をも惱ますといふ意ぢや。

鷲と蝸牛の事

或鷲蝸牛を見付けて食はうとすれども、叶はなんだれば、鴉が側から「われにその半分を下されば、聞召す様を敎へまらせうず、その蝸牛を取つて高う飛上り、石の上に落させられい」と云へば、鷲その如くする時、容易う割れた。

下心

縱令いかなる威勢位に盛なる者でありといふとも、餘の人の意見をば何時も聞かうずる（四五〇）ことが專ぢや、威勢は智慧を增すものではおりない、智慧は學者のみにある。

鴉と狐の事

或時鴉食を求得て、樹の上に休み居るに、狐も食を求むれども得いで、馳歸るとて、鴉の銜んでゐる肉臠を見て、羨しう思ひ、何とぞして之を誑いて取らばやと工んだが、鴉の居た樹の本に行つて云うたは、「いかに諸鳥の中の勝れて氣高い鴉殿、御邊の翼の黑う輝くは衮龍の御衣か、又は錦か、縫物か、眞に奇妙な裝束ぢや、然れども此處に一つの不足があると人皆これを沙汰する、其を何ぞといふに、音聲が聊鼻聲で、明にないと申すが、眞や此頃は音聲も明に成つて、歌はせらるゝ、聲も面白いと承はる、一曲聞かさせられいかし」と云へば、鴉この事を聞いて、眞實かと心得て、一曲揚げうと口を開くと共に、肉臠をば落いた。狐下で落しもつけず、之を食うた。

人より追従せらるゝことを眞實と信ずる(四五一)ならば、遂には其身の損失と成り、剩さへ諸人より嘲られうことは疑ない。

下心

狗兒と馬の事

狗兒をその主人愛して、常に膝の上に置き、抱擁へて不便を加へられた。又或時その主人外から歸られたれば、その膝に上り、胸に手を掛け、口を舐りなどして、いと馴々しい體であつたに由て、主人愈々愛せられた所で、驢馬この由を見て羨む心が起つたか、「われも彼の如くにして愛せられう」と思ひ、或時主人の胸に兩足を擧げ、口を舐り、其座を駈廻れば、主人は大きに腹を立てて、散々

に打擲し、元の厩へ追下された。

下心

わが身の不器量なことをば顧いで、人の器用と主人に愛せらるゝことを羨む者は、忽ち恥を被いて退くものぢや。

獅子と鼠の事

獅子王寝入つたあたりに、數多の鼠どもが徘徊して走廻つたが、或鼠獅子王の(四五二)上にとびあがつた時、獅子王これに愕えて眼を覺まいて、かの鼠を掴うで宙に差上げた。鼠もそこで大に肝を消し、謹んで申したは、「いかに獅子王聞召されい、緩怠を存じては仕らぬ」と悲しむに由て、獅子も心中に思ふは、「物の數でもな

い小鼠どもを、わが手に掛けて殺さうこと、却つて我名を汚すに似た」と思うて、忽ち赦いて遣つたれば、鼠はあまの命を助かつて、「此御恩をば何時までも忘却つかまつるまじい」と禮を爲いて去つた。 或時かの獅子王山中で羂に罹り、進退こゝに谷つたに由て、聲をあげて叫ぶ程に、件の鼠が聞きつけて、急ぎ其邊に走來て、獅子王に禮を爲いて云ふは、「いかに獅子王殿、心を竭させらるゝな、先年蒙つた御恩を報じまつらうずる」と云うて、羂の端ばしを喰切れば、獅子王難なう免れたと申す。

下心

威勢威光の天下に聞えわたる樣な者とても誰をも卑しめず、賤しい者にも讐を爲さず、却て情を先とせうことぢや。 いかに

賤しい者なれども、時としては貴人高家の助となることもあるものぢや。

(四五三) 燕と諸鳥の事

或人麻の種子を播くところを見て、燕これを悲しみ合うた。日を經て次第に苗に生出れば、愈燕これを悲しうだところで、諸鳥これを見て笑うて云ふは、「何故に燕は悲しむぞ」と問へば、燕答へて云ふは、「この麻が生長して羂となり、網とならば、われらが果くちぢや、之を思へば愁嘆する、おの〳〵も此苗の小い時、みな引棄てさせられいかし」と勸むれども、諸鳥は却て嘲れば、燕の云ふは、「吾は今よりおの〳〵に一味を致すまい、唯人間と熟懇をせう

ずる」と云うて、燕ばかりは人の家の内に巣を掛け、子孫を育つるものぢや。

下心

遠慮のない者は必ず近い憂があるものぢや。少しの火を消さねば猛火の禍が出來、少しの過失を防がねば大な咎をするものぢや。

エソポ、アテナスの人々に述べらるゝ譬喩の事

アテナスの在處初は主人も無うて、治下の宿老の評定を以て治めたに、何とか談合が破れつらう、主人を定めて人の下人と(四五)

なり、少しの過失をも宥さず成敗せられて、後悔するをりふし、エソポに向うて其思を述ぶるところに、譬喩を述べて云ふは、『或川のほとりに蛙ども思ふ様は、「われらに主人が無いに由て、様々の者どもに或は食はれ、或は侮らるゝこと、口惜しいことぢや」と云うて、天に祈つて云ふは、「いかでか吾等にばかり主人を下されぬぞ、仰ぎ願くは主人を下されよかし」と申せば、天これを憐ませられて、柱を一本下さるれば、蛙ども事ともせいで、結句その上にのぼり、船車などの様に乗物にして、重ねて蛙ども天に奏聞申すは、「以前の主人は無心の枯木で御座れば、然るべい主人を與へ下されい」と申すに由て、然らばとあつて、後には鶴を主人として與へ下された、それよりして鶴は件の柱に坐して、邊に來る蛙ども

を一も殘さず食ふに由て、蛙の進退難儀に極り、また天に申すは、「吾等が一類を盡く滅亡に及ぼすを憐ませられい」と賴み奉れば、其時天から仰せらるゝは、「汝はわが定を背いて自己を專とした ことなれば、今更改易することは成るまじい」との天勅ぢやに由て、今日に至つて蛙どもこ(四五五)の患に堪へず、主君にてまします鶴お宿に歸らせらるれば、其後に夜な〳〵天へ效ない怨を爲いて叫ぶ。』

下心

人每に當時の主人の柔和なをば臆病で役に立たぬと云ひ、武邊者を强いと云うて否がり、前のを譽めて、當時のをば誹り恨むるものぢや。

鳶と鳩の事

鳩どもが群り居る處に、鳶が來て掴み殺さうとの風情ぢやに由て、この儀を口惜しう思ひ、鷹の方へ行つて云ふは、「今日より御邊を主人と敬はうずる、彼の鳶といふ賤しい無道人が吾等を侮り卑しむれば、賴み奉る」と云ふに由て、鷹はこの事幸ぢやと喜び、鳩に向うて云ふは、「いと容易い儀ぢや、急ぎ我方へおりやれ」と云うて、一も殘さず掴殺いた。其時或鳩進み出て申したは、「初め鳶から受けた恥辱は物の數でも無い、このお計らひは悉皆滅亡の基なれども、自業自滅のわざなれば、今更人をも世をも恨むることは無い」と云うて、死んだと見えた。

下心

萬事をせうと思はう時、先善う未來の損得を考へ、後に難の起りさうな事をばするな。苦しうで悔むは畜生のわざぞ。

狼と豚の事

ある豚、兒を産まうとするに、狼が來て云ふは「兼日申合はせうずる證左として、唯今御産の砌の力を添へう爲に參つた」と云へば、豚の云ふは「否々それは憚ぢや、殊更産後産前の砌は見苦しいことのみ多うござれば、疾う〳〵歸らせられい」と云へば、又おほかめの云ふやうは「志が淺くは何故にこれまでは參らうぞ、是非なう此に留まつて力を添へいでは」と云へども、豚强ちに辭退す

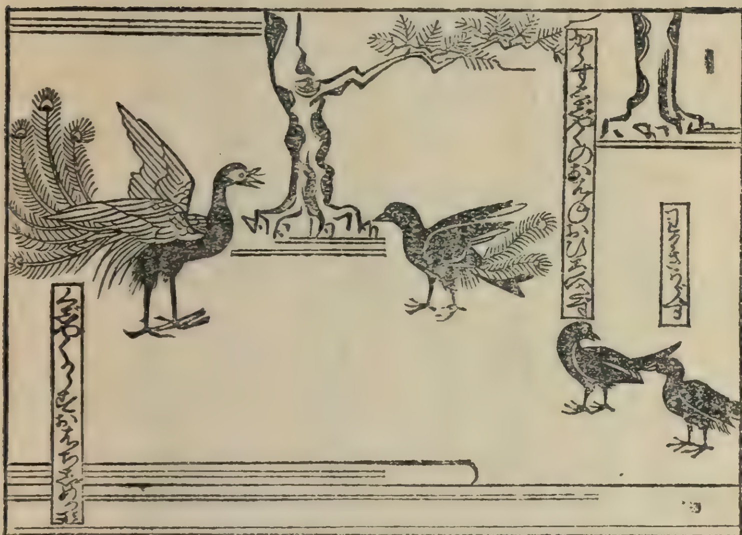
るに由て留まるにも及ばず、狼も歸り、豚も心安う產をした。

下心

平生不和な者の難儀を救はうといふことは有るまじい。聊も其言葉を信ずるな。

孔雀と鴉の事

或鴉おのれが人物を驕慢し、孔雀の羽根を見付けて此處彼處に纏ひ、爾餘(四五七)の鴉をば大に卑しめ、わが上はあるまじいと飛廻り、孔雀の中に交れば、孔雀安からず思ひ、「汝は我一族でないに、何故にわが一門の衣裳をば盗んで著たぞ」と、取回いて剝取り散散に打擲して、場中で恥を被かせたれば、泣く〱鴉の中に加は



（伊曾保物語萬治版本插繪）

り、尾羽を窄めて屈みまはつた。

下心

徳も無うて譽を揭げうずる者は必ず恥に遇はうず。惡人まぎれて善人の中に交ると云ふとも、言語進退に忽ちその惡が露れて、恥に及うで退かうずることは疑もない。

蠅と蟻の事

或蠅、蟻に語つて云ふは、「つら

つら物を案ずるに世上に、果報の甚じい者と云ふは即ち吾等が事であらうず、不肖至極な蟻どもは、なか／＼走られても及ぶまじいぞ、それを何故にといふに、天子將軍に捧ぐるものといへども、先われら其以前に恣に食ふ、しかのみならず上一人より下萬民の頭上を踏むに恐も無う、何たる美い酒、珍しい肴というても、孰れか吾等が手を掛けぬを食する人のある、孰れの人のか（日五八）しら吾等が踏物にならぬがあるか」と自慢すれば、蟻の云ふは「蠅殿の仰、一として僞はおりない、但し世上に沙汰致いたは、蠅ほど尾籠な者はおりない、手の及び力の及ぶほどは、誅伐せうと相謀まる、されば吾等を卑しめさせらるれども、春過ぎ夏經ち、力もつき弓のひきたてられう便もなうて、凍えて、屍を曝さるゝは、ま

た世に類もない淺間しい儀ぢや、物の數ではなけれども、吾等が一門は如何に烈しい冬というても饑渇に責めらるゝ苦しみも無し、春夏未來の覺悟をすれば、秋冬は裕に日を送る」と云へば、蠅は以前の廣言を忽ちひきかへて、おめ／＼として立去つた。

下心

當座の威勢に驕る者は、以來の難儀に躓かうず。われと躬を大に譽むる者は、まだ其辭も干ぬうちに、面目を失ふものぢや。

獅子と馬の事

或馬岡の邊に出て草を食むところに、獅子王これを見て、喰はうと思へども、「左右無う(四五九)走出るならば、あれも逃げうず、所詮

武略をして近からうずる」と思ひ、いかにも靜に柔輭な振で馬の傍に歩んで來「われは此頃醫道を稽古した、其方は痛む處があらば見せい、藥を施さう」と云ふところで、馬この計略を推察して「さては天の與ゆるところぢや、吾この程足に杙を踏立てて、歩むことも叶はぬ、憚ながら療治して下されい」と云へば、「いと容易いことぢや、先見よう」と云ふほどに、片足を上ぐれば、獅子王振上げて見るところを、眼と覺しいあたりを力に任せてしたゝかに踏めば、さしもに猛い獅子王も眼が眩うで、心氣を失ひ、彼處にかつぱと倒れたれば、其間に馬は遙に逃げのび、「やァしたりや」と嘲つて行つた。

下心

謀を以て人を誑し、おのれが依怙を尋ねう者は、一度は必ずその罰に遇はぬといふことはあるまい。

馬と驢馬の事

或馬に一段結構な鞍を置き、華にしてさいて通るに、驢馬の見苦しげなに重荷を負ほせて行合うたところで、かの乘(四六〇)馬がこれを見て、「汝なぜに吾を禮拜せぬぞ、唯今汝を踏倒さうも躬が儘ぢや」と、由々しげに罵つて過ぎたが、其馬程無う兩足を踏折つたに由て、乘馬には似合はぬというて、肥料などを負ほする爲に治下へ遣はいた。然あつて糞土を負ほせられて田畠に出るとき、件の驢馬に行遭へば、驢馬が立止まつて云ふは、「こゝを通るは

いつぞや對面した乘馬ではないか、さても其時の汝が過言は、いつぞの程にひきかへて斯く淺間しうは成下つたぞ、吾は元より賤しい身なれども、まだ糞土を運うだことはない」と、辱しめて過ぎた。

下心

人は威勢の盛なとて、他をばな卑しめそ、榮ゆる者の忽ち衰ゆるは、珍しからぬ世上の習ぢや。

鳥と獸の事

鳥と獸、仲が不和に成つて、弓箭に及ぶことがあつた。其時鳥類度々利を失うて、氣を呑み聲を呑むところに、蝙蝠手を換へて

獸の方へ降參するに由て鳥類の陣には愈智略を落し敗軍も遠からぬ體ぢやと密語くところに、鷲といふ荒武者が進出て、高らかに云ふは「おの〳〵は(四六一)何事をお侘びあるぞ、戰爭は勝負のことなれば、勝つも負くるも唯時の運に因ることぢや、小勢を以て大勢に勝つことは其例が無いでもない、假令鳳凰孔雀の手を換へらるゝとも、吾等が一族のあらうほどで、無下に敗軍することはあるまじいに、況んや蝙蝠づれの臆病者どもが五萬十萬敵に附いたればとて、戰場へ出ては一羽も追ふまいぞ、いざさらば今度は吾等が一門先を驅けて、戰爭を始めうずる、おの〳〵後を黑めさせられい」と、さも賴もしげに喧呼つて行けば、諸鳥もこれに氣を直いて、獸の陣へ押寄するに、獸もとから待掛けたこと

なれば、時も移さず打つて出て、いつもの如くしたれども、今度は鷲の調議を以て戰爭に花を散らすに由て、獸も多いといへども、豫て評議をせなんだに由て、散々に切立てられ、精兵數多打たせ、風に木の葉の散る樣に東西に敗北した。この後鳥も獸も義兵を止めて、和與の調へを爲いて、廣い野邊に出合うて散會した。其時鳥類申したは、今度互の戰爭に誰とても別心を企てた者はないに、蝙蝠が野心は前代未聞(四六二)の重罪ぢやに由て、今日より鳥類の一門を口つするぞ」と云うて、鳥の衣裳を剝取り、白晝に徘徊することも許されず、漸う辛い命ばかりを助かつて退出した。

下心

一族の仲を離れて天下國家を與へうといふとも、敵方に附く

な。假令一旦榮花に誇ることありといふとも、遂には敵方の心にも條ないものと思はうず。其上次第に道も狹うなり、身の置處もあるまいといふ儀ぢや。

鹿の事

或鹿水邊に出て水を飲むに、おのれが影の水に映つたを見て、思ふ樣は、「さて我角の火木利劍の樣に見ゆるもの、又世にあるべうも覺えぬ」と自慢し、又四の足の影の物弱げに、而も蹄の割れた體を見て、「さてもわが四足は頼もしげない弱い身かな、頭は堅く、足は弱い體を何に似たぞ」と、われと案じ煩らうて居たところに、人の來る音がするに由て、周章て騷いで山に入つたが、何と取外

いたか、角を茂りにひつ掛けて、抜差も叶はいで、既に危い時、鹿獨語して云ふは、「この(四六三)難に遭ふこと、尤道理ぢや、わが爲に善い事をば卑しめて、仇となるものを慢じた故ぢや」と思ひ當つた。

下心

人も分別なければ、身の爲に便となるものをば卑しめ、仇となることを尊むこと、多いものぢや。

腹と四肢・六根の事

眼耳鼻舌の四を先として手足各一味して、「腹といふ賤しい無道人、その身は何の業もなさいで、吾等を下人の樣に使ひ、おのれは主君の風情をなすこと、近頃狼藉千萬ぢや、所詮今より腹に奉

公すまじい」と議定した。その時腹が云ふは、「おの〳〵の仰は尤お道理ぢや、されども吾幼少より少の業をしたこともない、偏に御免を蒙れ」と詫ぶれども、各々憤深うして、二三个日は少の事もせいで腹を痛めうとの評議に濟んで、日數を經る程に、次第に四肢六根は弱り果て、進退こゝに谷つた。其時おの〳〵仰天して、「今こそ思當つたれ、四肢六根の働きは偏に腹の力に因つてのことぞ、然らば腹に懇望せよ」とて、前々の如く(四六四)奉公に油斷あるまいと云うて、少も怠りなう仕へた。

下心

總じて下﨟無うて上﨟も無く、無能なものが無うては能者の立つこともない。

パストルと狼の事

或人狼を殺さうとて、追掛けて行くに、何としたか、おほかめは或茂に入つた。したを其邊に居合うたパストル、この狼の隠れた處をよう見たに由て、狼その人の前に來て云ふは「いかにパストル聞召せ、われ程不運な者はまたも御座るまい、唯今隠れた處を人々問ふとも、露いて下されな」と慇懃に賴うだ。パストル「おう、何より容易いことぢや」と、さも賴もしげに約束した。狼これを眞實と心得、その辭に安堵して隠伏いたところに、狩人來て、その邊を尋ぬるに、パストルもこれを究竟の砌ぢやと思ひ、言葉では其でもない處を敎へ、眼を以て臥處を敎へた。然れども狩人

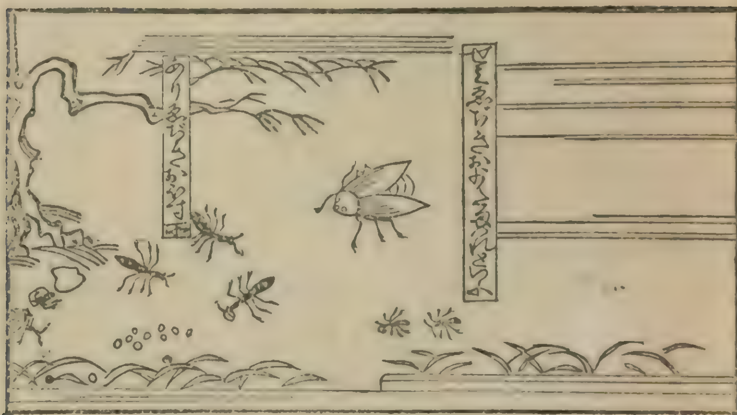
バストルの眼づかひを見知らいで、あらぬ處へ過行いたれば、狼、えたりかしこしと其處を逃去つた。其後かの狼にバストル行逢うて、「さても先度は危い命を(四六五)わが調略を以て助けたれば、定めて其恩をばよも思ひ忘られじ」と云へば、狼答へて云ふは、「仰の如く御身の舌の先は辱けれども、眼は拔いて取りたいぞ」と。

下心

佞人は心と辭と相違うて、口には追從、諂を本とし、心には人を譖でうことをのみ工むに由て、忠言少も德とならず。

蟬と蟻との事

或冬の半に蟻ども數多穴より五穀を出いて日に曝し、風に吹



(伊曾保物語萬治版本插繪)

かするを、蟬が來てこれを貰うた。蟻の云ふは「御邊は過ぎた夏秋は何事を營まれたぞ」。蟬の云ふは「夏と秋の間は吟曲に取紛れて、少も暇を得なんだに由て、何たる營もせなんだ」と云ふ。蟻「實に〱其分ぢや、夏秋謠ひ遊ばれた如く、今も祕曲を盡されてよからうず」とて、散々に嘲り、少の食を取らせて戻いた。

下心

人は力の盡きぬうちに、未來の務を

することが肝要ぢや。少の力と閑(四六六)ある時、娛樂を事とせう者は必ず後に難を受けいでは叶ふまい。

狼と狐の事

或狐、川端に居て魚を食するところに、狼上に臨うで其處へ來て云ふは、「われに其魚を食はせい」。狐答へて云ふは、「それがしの食殘いたをば何として參らせうぞ、籠を一つ下さらば、お望の儘に魚を捕る調義を敎へ申さうずる」と云ふ。狼「それは何より容易いことぢや」とて、近い里より籠を取つて來た。狐かの籠を狼の尾先に括附けて、「これを此川の中で先へ曳かせられい、吾等後より魚を追入れうずる」と云へば、狼實にもと喜うで、水の中に跳

入つて、泳ぎゆく。狐後から石をひたもの取入るゝに由て、後を見返り、「魚が多う入つたやら、はや先へ行くことが叶はぬが何と」と問うた。狐「まことに過分に魚が入つてござるに由て、吾等が力では引上げ難い、さらば誰ぞ合力に傭はう」とて、近い里に往いて、「この邊の羊を食ふ狼唯今水に溺れて死せうとするぞ、人々來て殺せ」とのゝしれば、吾先にと走行いて、川の中な（四六七）狼を散々に打擲するに、或人刀を拔いて斬らうとしたが、斬り外いて尾を打切つたれば、辛い命ばかり生きて、山へ入つた。又その時分獸の王である獅子病して、大事に極るに由て、いづれも獸ども踵を接いで、其山に伺候する。其中に狼も出て云ふは、「われ此程名醫に傳へ申したことがある、この御煩の病症には、唐物も、和藥も用

ゆるに足らぬ、唯狐の生皮を剝いで、まだその暖まりの去らぬうちに、皮肉を包み暖めさせられば、御平癒あらうずる」と。然るを其邊に狐の穴があつて、窃に聞いて、武略をせうとて全體を泥の中に投げて、見苦しう汚れて、獅子王の前に敬跪つた。獅子、狐を招き、「近う來い、言はうずることがある、今日より汝を我妻と定めう」と云うたれば、狐答へて云ふは、「仰は天山辱いと雖も、御覽せらるる如く、餘に泥に汚れて御座をも不淨になし奉らば愈お煩の素ともならうず、然らば罷歸つて身をも淸めて參らうずる」と言終つてから、「われ此頃これらのお煩に妙藥があることを習うてござる、但しあるまじいことなれば(四六八)、良藥と申しても益ないことか、千萬に一つもあるに於ては、狼の尾の切れたを取つて、生

皮を剝いで、まだ暖かまりの冷めぬうちに皮肉を包ませられば、最も奇妙不思議な藥ぢや」と云うたところで、其傍に件の狼が居たを忽ち摑うで引寄せ、面と手足の皮ばかりを殘いて、丸剝に剝いで、獅子の全體を包み、狼をば其儘差放いた。折節夏のことなれば、蟻蠅が群つてせゝるほどに、狼の悲は唯一つでもなかつた。さて件の狐或岡に休んで居るところに、彼狼あはれといふもおろかな體で過行くを見て、狐が呼掛けて云ふは、「唯今彼程の炎天に頭巾を被ぎ、足袋を穿き、弓懸を佩いて、此處を過ぐるは誰ぞ」と散々に嘲り、「いかに狼善う聞け、人の上を訴ゆる者は、血を銜んで人に吐掛くると同じことぢや、吐掛けうとするよりも、先その口を汚すと云ふことがある、忠言をこそえ言はずとも、せめて讒言

を吐くな」と云うたと申す。

下心

讒者の終に身を害するは、其身の口ゆゑぢやといふことを思へ。

（四六九）鳩と蟻の事

或時蟻が海邊に出てゆくところに、俄に大な浪が打つて來て、引連れられ、既に命も危い樣に漂ひゆくを、梢から鳩が見たが、それが難儀を救はうと思うたか、樹の枝を喰切つて、蟻の邊へ投



（伊曾保物語萬治版本插絵）

落せば、蟻は大に便を得て、其枝に上つて、水際に上つた。暫して或人が來て、其樹の枝に鳩の羂を刺いたれば、かの蟻たゞ今の恩賞を報ぜうずると思うてか、その人の足をしたゝかに喰うたれば、羂を投棄てて先その足を撫摩る間に、鳩はこの由を見及うで、忽ちそこを立つて往んだと申す。

下心

人より恩を蒙つては、そなたもそれを報ぜう志をお持ちあれ、恩を知らぬ者は蟻蟲にも劣るといふことぢや。

エソポが作物語の下巻

鶏と下女の事

或家の主人二人の下女を使はれたが、(四七〇)拂曉にそれらを起いて働かする爲に、鶏を飼うて時を計られたを、下女これを大に嫌うて、彼鶏さへ無いならば、これこそ拂曉には起されまじいものと思うて、二人言合せて密に鶏を殺いた。家の主人鶏の聲にこそ時を知つて起されたれども、鶏が無ければ時節を計ることが叶はいで、夜半前から起いて、仕事を言付けらるゝに由て、下女ども大に退屈して、鳥は物かはと苦しうだ。

下心

遠慮の無い者は後の難儀を顧みいで、初一念に憤を散じて、大事が出來してから、悔むに益ないことをのみ仕出すものぢや。

二人の知音の事

或時爾餘に混せぬ二人の知音、打連れだつて行く道で、熊といふ獸に行遇うて、一人が樹に登り、いま一人は熊と鬪うたが、精力が盡くれば地に倒れ、虚死をしたれば、かの獸堅氣で、死人には害をなさぬものぢや。されどもその獸生死の安否を試みようと思うたか、耳のほとり、口のあたりを嗅いでみれども、死んだ如(一四七)くに動かなんだれば、其處を退いた。その時、樹に登つた者が下りて、其人に近づいて「さて唯今御邊に、かの獸が私語いたことは

何事ぞ」と尋ぬれば、答へて云ふは「かの獸われに教訓を爲いた、それを何ぞといふに、——汝向後御身の樣に大事に臨うで見放さうする者と知音すな——と」。

下心

その如く憂き時連れぬ伴侶をば友とするな。

棕梠と竹の事

或時棕梠、竹に向うて「いかに竹、善う聞け、汝程世に弱うてみもない者はあるまじい、僅の風にも恐れ戰いて、靡くばかりぢや、吾は少も志を撓めず、不斷健氣にして居る」と云へば、竹はこのことを聞けども(眞實なれば)兎角とんずるに及ばいで、閉口して畏ま

つたが、軈てその日大な旋風が吹いて、鳴動して來たが、竹は素から恐を爲いて首を地に下げ、謙遜つたれば、恙なう起上つた。然るに棕梠は兼日の利口の如く志を下さず、肘を張つて居たを、何かは怺えう、散々に吹折つて根掘になつて果てた。

下心

（四七二）高ぶる者は害せられ、從ふ者は却て他を制するぞ。

大海と野人の事

或時野人海邊に出て、海の碧の和なを見れば、數多の廻船が東から西に往くもあり、鷗の砂に印を刻むもあり、繪に畫くとも、筆にも及ばぬ景氣に乘じて、心に思ふ樣は、「さても吾等が業ほど物

憂いことはあるまじい、山野を家にし、田畠に汗を流し、氷を耕し、雨を植ゆることは、斯様の量見を辨へぬ故ぢや、唯今から一跡を估却して船の上の商賣をするには若くまじい」と思うて、農具、牛馬を賣つて、其里の串柹を買取つて、港に下つて渡海の便船を得て、向の國に渡るところで、俄に大風が吹いて來て、船を覆さうとすれば、やう／＼辛い命ばかりを生けて歸つた。暫して波風も早穏になり、海上も悠々としたを見て、海に向うて叱つて云ふは、「いかに大海善う聞け、有程の串柹は皆汝に與へつ、又先の如く蟠つて躬を謀るとも、再び(四十三)串柹をば食はすることはあるまじいぞ」と。

下心

諸職共に辛勞のあることを、まだ知らぬものは、わが業ばかり苦しうて、他人は辛勞の無いかと羨み、新しい道をせうとするに由て、以前の辛勞よりも尙大な苦患に遭うて、身を知るものぢや。

炭燒と洗濯人の事

或炭燒、洗濯人の許に行つてみれば、家も廣う、間々も多いを見て、「いかに主人、わが借用した家は膝を容るゝにも足らず、狹う難儀に及べば、慈悲の上から、この一間を吾にお貸やれ」と云へば、主人答へて云ふは、「仰せは尤なれども、我身に取つては叶ひ難い、故を如何といふに、躬が一七日の間洗ひ淸めう程のものを、其方の一時召されうことを以て汚されうずれば、少の間も叶ふまじい」

と。

下心

仁者を友にせう人は、悪い者に遠ざからずんば、必ず其名も其徳も亡びようぞ。

病者と醫師の事

或醫師一人の病者の許に見舞ひ、氣(四七四)分の趣を問ふに、病者の云ふは「今宵鷄の鳴く時分から今まで、汗の出ることは車軸を流す如くぢや」と云へば、醫者の云ふは、「一段それは希ふことぢや」と。其翌日また來て、「氣分は何と」と問ふに、病者の云ふは、「今朝よりしたゝか震付いた」と。醫者は「一段これも良いことぢや」。又

その翌日來て「如何」と問ふに、病者の云ふは、「昨日の暮ほどから小腹の邊が刳る樣に痛うて、瀉することが度々に及ぶ」と。醫者の云ふは、「それは勝れて良い徴候ぢや」と云うて往んだ。病者、看病する人に云ふは、「醫者は今迄出來る程の病をば皆よい〳〵と言はるれども、躬ははや死ぬるに近い」と。

下心

追從ばかりで人を諂ふ者の言ふことを信ずるな。其言葉の下から大事が起らうず。

陣頭の貝吹の事

或時この役者敵から生擒にせられ、忽ち誅伐を加へうずると

するに、彼者聲を揚げて悲しうで云ふは、「いかに人々、吾には罪の無いに、何故に殺さうとはさせらるゝぞ、其仔細は、われは此年月人を害することも無し、唯出陣の時貝を吹くこと、これ家の(四七五)役なれば、勤むるまでぢや、更に面々に仇を為すことはない」と。敵方これを聞いて云ふは、「それに由てこそ尚殺さうずることなれ、それを何故にといふに、汝は戰場に出て、楯鋒を執つては働かねども、貝鉦を鳴らせば、味方の勇氣に力を添へて、戰鬪に進むものなれば、赦免することはあるまじい」と云うて、殺いた。

下心

假令その身は犯さずとも、罪を勸むる題目となるものは、凡人よりも重罪に附せうずることである。

母と子の事

或童、手習に遣る處から友達の手本を盜んで來れども、その母はこれを折檻もせいで置くに由て、日々に筆墨などを盜んで來て、盜ほどの面白いことは無いと思ひ、成人するに從うて、後には大盜人となつて、其罪が露はるれば、守護の處に渡され、成敗の場に曳かるゝに臨うで、その母後から泣慕ふを、彼の盜人聲を聞いて、警固の武士に「我母に密に言ひたいことがある、傍に呼うで下されい」と云うたれば、母何事も無う、悲みの涙を押(四七六)へて近けば、「わが口へ耳を寄せさせられい」と云ふほどに、乃ち耳を寄せたれば、片方の耳を喰切つて、大に怒るに由て、看る人各肝を消し、「さ

ても、あの盗人は前代未聞の奴ぢや、盗をするのみならず、わが母に喰付くは、眞に畜類にも劣つた」と云へば、盗人萬民の中でいかにも高聲に罵つたは「わが母ほどの慳貪第一の者は世にあるまじい、吾が此分になることは彼が仕業ぢや、所以を如何といふに、吾幼少の時、友達の手本墨筆を盗んで來れども、遂に一度も折檻を加へいで、其儘盗の癖を棄ていで此分になつた、吾を誅するものは即ち母ぢや」と云うて、斬られた。

下心

少の惡を懲さねば、大な惡が世に蔓るといふことを知れ。

鷄と犬の事

或時鷄と犬と打連立つて野遊したに、日が既に暮るれば、鷄は梢に登り、犬はその樹の下に眠つた。さうある處へ狐その邊近う居たが、鷄の(四七七)曉歌ふを聞いて走つて來て、木の下に寄つて云うたは、「いかに鷄、久しう見參せぬ、殊には一曲の妙な聲が世に隱ない、一節うけたまはらうずる爲に參つたれば、少の間此處におりあれ」と云へば、鷄答へて云ふは、「眞に其以後は久しう對面申さぬ、懷しう存ずるところに、お尋は辱い、軈てそれへ參らうず、先その邊に召置いた私が隨身をおこさせられい」と。狐は眞實かと心得て、「誰かある、誰かある」と叫ぶ程に、犬は睡眠を覺いて、忽ち狐にとび掛つて、唯一口に嚙殺いた。

下心

賢才のある人は、わが敵を手づから害せねども、又吾よりも強い者を以て殺さるゝものぢや。

獅子王と熊との事

或時羊の兒一疋、熊と獅子との二つの手に掛つて死んだ。此二つの獣の互に自他の勝負を争うて、朝から夕さりまで闘へども、遂にその勝負が見えいで、争ひ草臥れて、両方に立別れて居るところに、狐が他所から之を見て、二つ(四七八)の中に置かれた羊を取つて食うた。二疋の猛い獣ども「さても安からぬ狐めが働かな」とは思へども、流石に大敵を前に置いたれば、小敵を拒むに足らいで、食はれた。

下心

兩方から爭ふ者を中から出て取ることは、多いものぢや。鷸蚌が相爭うて二つながら漁人の手に落つるといふも、これらの事をいうた。

貪欲な者の事

或貪欲な者一跡を盡く估却して、金子百兩を求め、人も行かぬ處に穴を掘つて、深う隱せども、それも猶疑はしうて、毎日その處に行つて見舞うた。さうあれば或人かの者の日々同じ處へ往つては返り、往つては返りするを見て、大に怪しみ、隙を窺うて、かの處を善う〳〵見れば、件の穴を見付け、それを盡く取つて歸つ

た。その翌日いつもの如く行て見れば、穴も掘られ、黄金も無いことを仰天して、五體を地に投げ、悶え焦れて泣き歎くところに、或人其處を通つたが、豫て其事を知つたか、嘲つて云ふは、「御邊の氣遣は無益ぢや、其方の賢い謀をもつて其悲をお宥めあれ、先石を取つて件の金子の重さに懸けて、その穴にお隱しやれ、さて其方の心には、黄金を使ひもせず、家にさへも置かいで、山野の土の中に埋むることは、石と同じことではないか」と云うて去つた。

(四七九)

下心

假令金銀を山ほど積んで持つとも、使はいで蓄ゆる人は、石を持つたも同前ぢや。

驢馬と狐の事

或時驢馬、獅子の皮を被いて此處彼處を駈廻つて、萬の獸を威いたに、狐に行逢うて澁面を作つたれば、狐は元より賢い者なれば、蹄の體をやがて見知つて、これは化物ぞと心得て、「いかに優れて氣高い裝なるお方へ申さうずる事がある、其方のお聲をばやがて承り知つた」と云うて、大に嘲つたれば、それから尾をすべて去つた。

下心

何をも知らいで知つた振をせば、忽ち（四八〇）言下に人から見知られて、恥に及うで退かうず。

馬と驢馬との事

或人驢馬と馬とに荷を負ほせて行くが、驢馬の荷物が餘り過ぎて、先へ行き著かう樣もなければ、驢馬から馬に謝辭をして云ふ樣は、「其方と吾は一門で、そつとの高下を以て隔つた、わが荷物が餘り過ぎて、一足も曳かうずるやうがない、少其方の上に付けて、吾を助けられいかし」と。馬は一向承引せいで、結句大に嘲つて先へ行つたれば、驢馬は力に及ばいで、遂に倒れて死んだ。そこで此馬追は爲う事が無うて、驢馬に付けた荷物をも悉く馬一疋に取付けて、剩さへ驢馬の皮をも剝いで、馬に負ほせて行くところで、其時馬はわが愚痴なることを顧み、「嚮に驢馬の詫びた時、

そつと合力したらば、これほどの重荷は持つまじいものを」と悔めども、益がなかつた。

下心

理の高ずるは非の一倍と云うて、道理を承引せぬ者は、必ず非分の害に遭はいで叶はぬものぢや。

（四八二）二人同道して行く事

二人同じ様に歩んで行くところに、一人斧を見附けて拾取るところで、ま一人の云ふは、「其方一人のにはせまじい、唯これは二人のにせうぞ」と。されども一圓同心せなんだ。然うあつて後から其主が走つて來て、持つた斧を「これは躬がぢや」と云うて、奪

はうとして諍ふところで、斧を拾うた者「なう、同心した人何故に其方は力をお添へやらぬぞ」と云へば、ま一人が答へて曰ふは、「唯貴所御一人ので御座らうず」と。

下心

好い時に友にせぬ人をば、悪事の時も伴ふことはなるまい。

野牛と狼の事

或野牛おのれが立處を離れて、彼處此處を徘徊したが、或茂りから狼が走り出て、既に食はうとしたときに、野牛狼に云ふは、「とても吾唯今そなたから食はれうず、然らば多年好いた道であれば、最後に一奏舞うて死なうず、一曲添聲にあづかれ」と云へば、狼

實にもと思ひ、高聲に謠うたれば、四邊の犬どもが聞付けて、聲を知方に駈けて來たれば、狼は即ち(四八二)逃げて去ぬるが、立返つて野牛へ云ふは、「われは貴邊の料理者なれば、身にも似合はぬ音曲をして、今日の獲物を失うた」と。

下心

わが身に當る役に怠つて他の藝を爲うとするものは、日々にその德を亡ぼすものぢや。

驢馬と獅子の事

或時驢馬が一疋野に出た折節、獅子がこれを見て、究竟の食物ぢやと喜うで來たが、その邊近う鷄が居て、高聲に時を謠うたれ

ば、獅子はその聲に恐れて逃去つたところで、驢馬が心に思ふやうは、「あつぱれ獅子は臆病な者かな、吾を見て一足を止めいで逃げ行くよ」と、跡を慕うてゆく程に、鷄の聲も聞えなんだれば、獅子王忽ち取つて回いて、唯一口に食殺さうとするところで、驢馬「わが身の爲には逃げなんだものを」と其時悟つたれども、悔ゆるに效も無う亡ぼされた。

下心

強敵が逃ぐると見ゆるとも、勝つに乘るな、必ずしも心には別の謀略があらうぞ。

(四八三) 蜜造の事

或盗人蜜を造るところに行つて見れば、その主折節他行して田舎に寄つて、究竟の隙ぢやと心得、蜜を悉く盗んで歸つた。其後主人は歸つて、器物の盡く明いたを見て、「さても不思議ぢや」と此處彼處を見回いたれば、蜂はその主人を散々に螫いたれば、恨みて云ふは、「汝は盗人をば螫さいで、養育する者を螫すか」と云うた。

下心

數多の人、盗人をば家の爲に成るものかと心得、眞實の爲に成る者をば盗人の樣に疎むことが多い。

鴉と鳩の事

或鴉とつと肥えた鳩を見て、いかう羨ましう思うて、石灰を身に塗つて、鳩に交つて餌を食うたところで、初の程は鳩も鴉とは知らいで群り居たが、後には聲で聞知つて、鳩の仲を追出いた。鴉も亦その色姿の異相なを見て、一類にせいで、兩方に離れて、何方へも附かぬ浪人になつた。

下心

詭計つて為る謀略は一旦の依怙には(四八四)なれども、遂には知音にも親みにも離れて、身の置處もないものぢや。

蝙と獅子王の事

或蝙ひとつ獅子王の處に行つて、「其方は躬よりも强うはない、

それに由て某は貴所を物とも思はぬ、これを口惜しう思はせられば、出て勝負を決しさせられい」と云ふところで、獅子王さらばと云うて、穴の中から出て、「蠅めは何處に居るぞ」と云へば、忽ち獅子の鼻の尖に取付いて、「これは何と」といへば、獅子王大に腹を立てて、われと鼻を巖石に打當てて、したゝかに傷を被つて頭を下げて穴に入つたれば、蠅は傍から勝鬨を揚げて還るとて、或樹蔭の蜘蛛の網に掛つて、卽ち蜘蛛から食はれた。

下心

數多の人大な事には利運を開けども、些細の事には負くることが多い。

盗人と犬の事

或盗人福人の家に潜入らうずると思へども、番の爲に犬を數多飼うて置いたれば、吠立てられて、え入らなんだ。其に由て盗人の謀事に、先度々パンを持つて來て犬に食はせて、其身を見知られうとした。さ(四八五)て犬ども漸く見知つたと思ふ時、窃に潜入らうとすれば、常よりも犬どもが尚吠えまはるところで、盗人犬に云ふは「さても汝は、わが恩を知らぬものかな、躬が汝に常に不便を加へたは、是時見知られう爲ぢや」と。 犬が又盗人に答へて云ふは「其方が會々一口のパンを與れ、多年の主人の過分の財寶を取りごとは曲事ぢや、急いで其處を立去れ」と云うた。

下心

主人に志を深うする者は、少の利に由て多くの恩を忘れぬものぢや。されども二心のあるものは、少の利を以ても數多の恩を忘るゝ。

老いた犬の事

或人逸物の犬を飼うたが、時として野猪、鹿のしゝにも追ひつかず、或は度々食止めなんだに由て、鞭を當つれば、犬が畏まつて申したは「わが年盛の時は、鹿のしゝ猪のしゝをも遣らず過ごさず、生とし生けるものを食止めて、忠節を盡いたれども、今は既に齢も傾いて、齒も拔け、力も落ちて、唯通常の犬にも劣つた、さても

人間はわが依怙ばかりを本にして、（四八六）嚮の忠節をば打忘れて、當座の奉公ばかりを本とすることの歎かしさよ」と云うて、涙を流し「（道理を正いて見るに於ては）老いてこそ猶丁寧を盡されうずることとなれ」と云うた。

下心

忠節を空しうする主人は、年寄犬、老いた馬を棄つるごとくぢや。

蝮蛇と小刀の事

或人蝮蛇を見て、打たうずる杖が無かつたれば、「眞實か、この蟲は鐵を置けば螫すことがないと云ふものを」と云うて、小刀を引

抜いて傍に置いて、其身は杖を尋ねに去つた。其間にまむしは小刀にとびかゝつて、ひた食ひに食うたところで、小刀が云ふは、「汝われをば誰と思ふぞ、千年萬年食ふといふとも、汝が歯は皆滅つて、躬は露ほども傷むまじいぞ」と。

下心

いかに腹が立てばとて力に叶はぬ相手に向うて仇をなさうと企つることは、土佛の水りなぶりぢや。

山と杣人の事

或杣人山にいつて、「斧の柄を一本く(四八七)だされば、一期の御恩と存ぜうずる」と、辭を崇め膝を折つて、これを乞ふところで、山か

ら「汝に許す」と下知をなすところで、その杣人斧の柄をしすげてから、山林を盡く伐りくづすに由て、諸木が山を怨みて云ふは、「何故に山は此樣な赦免をばおやりやつたぞ、斧の柄をさへ許されずは、何故に吾等は滅びようぞ」と。

下心

謀計を含んで詫言をする者の手段を顧みずは、忽ち滅亡をせうず。

狐と鼬の事

或狐いかにも瘠せて、人の倉のいかにも狹い孔から入つて、小麥を思ふ儘に食うてから、出でうとすれども、腹より下はえ出でい

で苦しむところを、鼬が見て、意見を加へて云ふは、「元の孔を出うと思はせられば、元のやうに瘠せさせられい」と。

下心

數多の人、貧な時は安樂なれども、富貴になれば苦痛逼迫に及ぶことが多い。

龜と鷲の事

或龜飛びたい心がついて、鷲の許に行つて、「飛ばうずる樣を敎へさせられい。お禮には(四八八)名珠を奉らうずる」と云ふに由て、鷲は搔摑うで雲まで上つて、「望は達したか」と云へば、「なか〳〵、今こそ望は達したれ」と云ふほどに、「さらば約束の珠をくれい」と云へ

ば、與へうずる珠が無うて、無言するに由て、巖の上に投げかけて殺いて食うた。

下心

數多の人は、わが身に應せぬ樂を工むから、一旦その樂をも遂ぐれども、その道から落ちて、身を過つものぢや。

漁人の事

或漁人網を引くに、引くことも叶はぬほど、網が重う覺えたれば、「何樣魚が多いぞ」と、勇み喜ぶことが限無うて、引上げて見れば、魚は稀で、石どもであつたところで、「さても無益の辛勞かな」と皆悲むところに、年寄つた漁人が諫めて、「何故に人々はお悲みある

ぞ、喜びと悲みは兄弟の如くぢや、又この後は喜びも來うず、この悲み侵されて再び網を引くまじい」と云うて、皆その悲みを改めなんだ。

下心

深う頼を掛けた事の手を空うす(四八九)ることは、深い悲みなり。又思ひもよらぬ幸に遇ふことの無いでもない。

野牛の兒と狼の事

野牛の母、草を食ひに野に出づる時、兒共に言置くやうは、「この穴の戶を內より善う閉ぢて居よ、何と外より呼び叩くといふとも、わが聲と又この樣に叩かずは、粗忽に開くな」と云うて出た。

狼、母の野に出た隙を狙うて來て、母の聲を似せて、其戸を叩いた。野牛の兒共內から聞いて、「聲は母の聲なれども、戸の叩き樣は狼ぞ」と云うて、ちつとも開けなんだ。

下心

子は親の意見に附くならば、惡しいことは少もあるまい、母の意見を聞かずは、忽ち身をも命をも失はうず。

童の羊を飼うた事

或童ひつじに草を飼うて居たが、動もすれば口遊に「狼の來るぞ」と叫ぶほどに、人々集れば、さも無うて歸ること、度々に及うだ。又或時まことに狼が來て、羊を食ふに由て、聲をはかりに叫喚べ

ども、例の虚言よと心得、出會ふ人無うて、盡く食ひ果された。

（四九〇）下心

常に虚言をいふ者は、縦令眞實をいふときも、人が信せぬものぢや。

鷲と鴉の事

或鷲巖の上から羊の居る上に飛來れば、鴉これを羨みて、曝いて置いた羊の皮の上に飛んで來たに出て、足に罹つて飛ぶことを得なんだところで、童どもその儘寄つてとらまへた。

下心

わが身に無いところを顧みず、他の得を構へて羨むなといふ

ことぢや。

狐と野牛の事

狐と野牛おほきに渇して、或井側の中へ連だつて入つて、思ふ儘に飲うで後、上らう様がなかつたところで、種々に思案をして見たれども、別に爲う様も無うて、狐野牛に力を添へて云ふは、「いかに野牛殿、お氣遣ひあるな、二人共に恙なう上る道を工出いた、先づ御邊延上つて、前足を井の側に投掛け、頭をも前へ傾けてござれ、某それを踏まへて先へ上つて、又御邊をも引上げうずる」と云ふ。野牛「この儀實にも」と領掌して、その言ふ儘に（四九二）したれば、狐跳んで井桁の中に跳上つて、跳ねびちらいて喜び、餘の嬉し

きに野牛のことをば、はたと打忘れた。野牛は何時引上ぐるぞと待てども待てども、狐は知らぬ顔して居るに由て、野牛罵つて云ふは、「やあ、貴所は約束は忘れたか」と問うたれば、狐「その事ぢや、御邊の頤にある鬚の數ほど、頭に智慧があるならば、遠慮もなう井側の中へは、はひるまいぞ」と云うて嘲つた。

下心

賢い人の習には、先事を始めぬ前に、その終を見るものぢや。

百姓と兒共の事

或百姓子を大勢もつたが、その子どもの仲が不和で、動もすれば喧嘩口論をして犇めくに由て、その父何とぞして此等が仲を

一味させたいと色々工めども、爲うずる樣も無かつたが、或時兒共一處に集り居たとき、父下人を召うで、「樹の楚を數多束ねて持つて來い」と云うて、その束を執つて、數多を一つにして、繩を以て思ふさま堅う卷きたてて、兒共に渡いて、「これを折れ」と云ふ。兒共吾も〳〵と力を盡いて折つてみれども、少も叶はなんだ。その(四九三)時、父氣條どもを乞うて解き、一把づゝ面々に渡いたれば、造作も無う折つた。それを見て父の云ふは、「面々もその如く、一人づゝの力は弱くとも、互に熟懇し、志を合するに於ては、何とした敵にも左右無う取拉がることあるまじいぞ」と言終つた。

下心

大概の一味を以て人間の仲も強く、又不和な時は國家も滅び

易いといふ義ぢや。

尾長鳥と孔雀の事

諸鳥一處に集つて評議して云ふは「世の中のものを見るに、帝王を持たぬ一類は無いに、獸に劣らう仔細はない、いざさらば此諸鳥の中より才智能く、藝他に優れられた人體を、高賤に拘はらず、今日より鳥の王と仰ぎ用ようずる」と云へば、各々この儀尤もと同心して、選ぶところに、孔雀差出て云ふは「願くは吾を帝王と仰がれよかし、とてもおのおのの中に我が器用に似た方々もあるまい」と云ふ。そのとき尾長鳥「孔雀の仰近頃聞えぬ次第ぢや、若し鷲などの樣な、わやく人吾等にとりかけ、(四九三)一大事に及ば

せうずる時、貴所の其翼の美しう光るばかりでは、防ぎ得させられまいぞ、生得人を治むる者は、その器用には由らぬ、其身に具はる智才と心の勇氣に極るぞ」と云うて、群集の前で散々に恥を被かせた。

下心

人民を司るものは色身の美麗なばかりでは濟まぬ、尾長鳥の云ふ如く、賢才に由るぞ。

鹿と兒の事

或鹿の兒、父に尋ねて云ふは、「いかに父御に、憚りながら、一つの不審を申上げうず、お姿を見まらすれば、手足もすつかりと輕げ

に、又角の物見なこと世に譬ふものも無く、元より走らせらるゝに迅いことも、世に雙がないと見及うでござれども、何とした仔細でばし御座るぞ、あの犬にばかり此處彼處で追はれさせらるるは、何が一つとして犬に劣らせらるゝことはあるぞ、これが不審に思はるゝ」と云ふ。鹿「されば其事ぢや、吾もそれが不審ぢや、あれに逃げう道理がないと心に思ふが、あの犬めが鳴く聲を聞きけば、胸打騷いで、逃げいでは叶はぬ」とぞ。

(四九四)下心

生得臆病な者は傍から何と力を添ゆれども、強い心が附きかぬるといふ意ぢや。

片眼な鹿の事

或片眼な鹿、海ばたを廻つて食を尋ぬるが、かの鹿思ふ様は、「われ眼をひとつ有ちたれば、別して用心が要つたことぢや」と心得ただてで良い方をば野の方へなし、海よりは大事あるまいと思うて、次第に先へ行けば、機しも其磯端を船が通つたが、この鹿を見て矢を射たてた。其時しゝが云ふは、「さても吾は符の悪い者かな、大事の出來ようと思うた方は大事無うて、思の外の方より大事が起つた」と云うて、死んだ。

下心

多分人は賢だてをして仕損ふものぢや。

鹿と葡萄の事

或鹿獵人より俄に追はるゝに由て、爲ん方なさに、其邊な葡萄の蔓の中へ身を隠いた。獵人その處を通れども、鹿を見付けいで、行過ぎた。その鹿「あら、今は辛い命を助かつたものかな」と思うて、首を差上げ、その葡萄の葉を食うたが、（四九五）その口音を獵人が聞付けて、怪しめて立返り、「さては蔓の蔭に何ぞ獸の居るものよ」と見れば、右の鹿を見付け、其儘射て取るところに、鹿の云ふは、「わが命を助けた此蔓の葉を食うた罰に、此科に遇ふぞ」と云うて、死んだ。

下心

恩を讐を以て報ずれば、天罰逃れずといふ義ぢや。

蟹と蛇の事

蟹と蛇互に熟懇し、或穴にふたつ共に年久しう住み居たに由て、蟹蛇に云ふは「あまり貴所と某は水と魚との如くぢやに由て、心を措かず申す、貴所の心の曲つたことを少お直しあれかし」と、折々意見を加ゆれども、蛇情強にして、少も聞入れなんだに由て、蟹心中に殊の外腹を立てて、「所詮かやうの徒者を娑婆塞げに生けて置いて、頭の痛いことを堪へうよりは」と、かの重代の鋏を以て、首を鋏切つて殺いたれば、蛇曲たまつて居たが、俄に直に成つたを見て、蟹「存生のとき其程直に心があつたらば、今この害（四九六）

をば受けまいものを」と云うた。

下心

人をたばからうとする者は、結句人より詭謀らるゝこと多いものぢや。

女人と大酒を飲む夫の事

或女人夫をもつたが、大上戸ぢやに由て、不断常住酒に酔ひ沈んで、偏に死人の如くであつた。それに由て女房はこの事を歎いて、「何とせば、この癖を直さうぞ」と案じ煩ふ中に、又大酒を飲み、前後も知らず酔ひ伏した所を、振擔げて、或棺の中へ納れて置いて、酔の醒方に及うで、彼女其棺の戸をほと〳〵と叩けば、内から

唯今起上つたと覺しい聲で「誰ぞ」と尋ぬれば、女房「これは死人に物を食はする者ぞ」と云へば、又内から「酒が無うては食物ばかりは、さのみ望ましうもない」と答へたところで、女房このことを聞いて力を落いて、「まだ彼は酒のことを忘れぬか、さては我手段も無益になつた」と歎いた。

下心

過失のまだ根をさゝぬうちには、改むることも叶はうずれども、舊い癖は悛めにくいものぢや。

(四九七)パストルの事

或パストル極寒の時分山野に出て、羊や野牛などの類を飼う

て居たに、俄に雪が降積んで、谷峰の別も見えず、山河には水嵩が増して、家路に歸らうずる樣もなければ、其處に止まつたが、糧に詰つて、飼育つる羊を殺いて、命を繼いだ。さう〳〵する程に、漸う羊も悉く食盡し、又野牛に取つて掛り、此をも食ひ果せども、まだ鄉に歸らうずる樣がなければ、また牛を食うた。此處で彼の番の爲に曳いて行つた犬どもが思ふ樣は、「祕藏せらるゝ彼の羊ども、野牛その外耕作を辛勞して、主の命の繼がるゝ牛をさへ食せらるゝ上は、況してやいはん、其下人の如く番をする吾等をも、油斷するものならば、やがて食はれうずることは疑も無い、いざ逃去つて命を活けう」と、皆駈落をした。

下心

親まうずる者に親み、不便を加へうずる者を其分にせぬ者をば、他人がやがて之を慳貪な人として、一味をせず、それを棄つるものぢや。

驢馬と狐の事

或時驢馬と狐同道して遊山するところ（四九八）に、何としたか強敵の獅子王に行逢うて、互にそれぞと目と目と見合せたところで、狐いまは逃れ難ければ、降参し、返忠して我命を繼がうずると思ふ心がついて、獅子王に申すは、「いかに吾等が帝王、聞かせられい、それがしが命を助けさせらるゝならば、彼の驢馬を御身の手の曲に廻るやうに致さうずる」と云うた。獅子王「なか〳〵、其分

にせい、汝をば宥さうぞ」と云ふに由て、狐驢馬を詭計つて、括を掛けて近邊へ連れて行けば、驢馬は元より不覺人なれば、忽ち括り掛つた。其處で獅子は「早驢馬は逃るゝ道がない、先づ狐を」と思うて、跳掛つて忽ちに食殺し、次に驢馬をも食うた。

下心

身の爲ばかりを思うて他人に仇をなす者は、その報を逃るゝことが叶はぬ。結句人より先に難に逢ふことが多い。

狼と子を持つた女の事

おほかめ一疋、或日獲物が無うて、餓に及うで、此處彼處を驅廻り、或山里の賤が庵の軒端に寄添うて聞けば、小い子の泣くを賺

すとて、その母「かまへて泣かば、おほ（四九九）かめに遣らうず」と云ふに由て、狼これを聞き、眞實かと思うて、「天晴これは好い仕合せかな」と待掛けて居れば、日もやう〳〵暮れゆいた。されども子をば與れいで剩さへ母の云ふやうは、「あら、いとほしの者や、氣遣するな、假令おほかめが來たりとも、其奴めをば打殺いて、皮を剝いでのけうぞ」と云ふに由て、狼おもふ樣は、「さりとては一口兩舌なものぢや、初は與れうと云うたが、今は又ひきかへて身を殺さうは、やれ皮を剝がうは、などと云ふか」と云うて、すご〳〵と其處を立去つた。

下心

人は多分心と言は似ぬもので、動もすれば、約束を變じ、思はぬ

ことをも言ふものぢや。

蛙と鼠の事

頃は彌生下旬のころぢやに、蛙と鼠或池の知行爭ひで、矛盾に及うだ。いづれも武具を揃へ、事も夥しい合戰になつて、鼠は伏草をし、蛙を惱ませども、蛙は少も臆せいで、いかにも打現はれ、喉吭を怒らかいて、大音を擧げて喚き叫うで戰ふに由て、その戰鬪と叫びの音は事も仰山にあつたところで、之を片傍から鳶が見て、「好い幸かな」と思うて、(五〇〇)兩方共に取つて食うた。

下心

慾心或は我慢によつて、同じ國處の人、喧嘩鬪諍をし、私取合に

及べば、他處他郷から其弊に乘つて、論をなす雙方ともに從ゆるものぢや。

或年寄つた獅子王の事

或獅子若盛のときは勇氣が過ぎて、有程の獸を欺き、仇を爲いたことは計られぬことであつた。この獅子年が寄つて、漸く行步も叶はぬに及うで、弱目の靈怪とやらに、野猪を始め、山牛その外驢馬までも、この獅子を蹈んづ蹶つするによつて、獅子涙を流いて云ふは、「さても哀しいことかな、身が全盛のとき恩を與へたものは、今何處に居るぞ、唯讎を結んだものばかり今は見ゆる」と。

下心

恩を忘るゝ者は多う、仇を報せぬものは稀な。

狐と狼の事

狐一疋餌を求めうと出たところに、或おほかめの餌ぶくれて、食ひ殘いた餌を枕にして居たところに行逢うて、誑さばやと思ひ、「いかに狼どの、何故に左樣に無所作には(五〇二)御座るぞ、出させられて、取らせられいかし」と云へば、狼やがてこの計略を覺つて、「何としたか所勞以ての外ぢや」というて、臥所を去らなんだところで、狐は「憎い奴が根性骨かな、さては爲うことがあるぞ」と思ひ、或野人の許に行つて右の樣を語れば、その人忽ち出會うて、おほかめをば殺いた。次ぐ日また其處に出て見れば、右の狐かの狼

の跡式を押領して、身代して居たを共にそれをも打殺いた。

下心

他の善いことを猜むものは、その罪が變じて身に及ぶものぢや。

老人の事

或老人の山賤薪を擔げて山より出たが、草臥れはてて薪をば側に落し置いて、ひたと仆れ伏いて、吐息をついて云ふは「あら、うとましや、長生をして斯樣な辛勞をせうよりも、今死んだは勝であらう、最後は何處に居るぞ、來いかし」と云ふところへ、モルテがひよつと來て、「これに居まらする、何の御用ぞ」と云へば、其時起上

つて「あまり草臥れたに、この薪を合力して、身が肩にお擔げあれ」と外いた。

（五〇二）下心

死にたきといふは、浮世の口遊、實の時は死なれざるものをと云ふつれぢや。

獅子と狐の事

獅子以ての外に相煩うて、散々の體であつたれば、萬の獸それを訪ひとむらふこと、暇も無かつた。その中に狐ばかり見えなんだ。是に於て獅子、狐の許へ消息して言遣るは「何とてそれには見えられぬぞ、爾餘の衆は多分見舞はるゝ、中に、餘り疎々しう

音信もないは曲もない次第ぢや、生得それにと吾とは深切の中なれば、逆心あらうずる儀でない、若し又躬が上を疑はるゝか、少も別心はない、假令害をなしたうても、今この體では叶はねば、お出を待ち存ずる」と書いたところで、狐謹んで「仰辱なう存ずる、さほどの事とも存ぜいで、此頃は無音、本意を背いてござる、唯今も參りたう存ずれども、玆に一つの不審がござる、萬の獸のお見舞に參られたとは覺しうて、御座所へ行つた足跡はあれども、出た足跡は一つも見えねば、覺束無う存ずる」と返事した。

下心

言葉の行蹟に違ふときは、人がこれを信せぬものぢや。

〔をはり〕

(五〇三)

エソポのフワブラスの目録

エソポのファブラスの目錄

文祿舊譯伊曾保物語　終

附錄

西洋文學翻譯の嚆矢

長頭丸が「頭も鬚もぬれわたりけり」といふ前句に「獅子野牛さてもかいたる油畫に」と附けた句がある。此句を載せた名著『あぶらかす』の出たのは寛永二十年で、天草の亂の數年後の事であるから、此附句を讀むと、何やら彼の亂後松平伊豆の屋敷に懸まはれたといふ遺徒山田右衞門作でも畫きさうな油畫の南蠻屛風を想像させる。長崎の埠頭に黑船が著いて、伴天連が身にはアビトと云ふものを著し、裾短く袖長き扮裝に、綠眼隆鼻、丈七尺に餘るとでも昔しの實記には形容されさうな姿で上陸して來ると、一方には黑奴が、南國から舶載した珍禽異獸を運んで居

る様な圖があり〳〵と眼に浮ぶ。尤も當時野牛は渡つたが、獅子まで南蠻人が持つて來たらうとは思はれぬ。そこで貞德の附句の油畫は、又一方には吾々の想像力をして、『伊曾保物語』の「獅子王、羊、牛、野牛の事」と題する有名な譬喩談を想起さしめるのである。『伊曾保物語』には、後にも述べる通り、種々の異板本があるが、『油糟』以前では、寛永十六年卯月出版の活字本と元和活字本とがあり、尚慶長活字本もあるといひ、繪卷物もあつたといふから、教訓の譬草として興がられたのみでなく、異俗殊風を喜んだ鎖國以前の民心には殊さら珍重され、果は油畫に畫かれるやうな機運になり、又實際畫かれなくとも遂に此俳人の取材にまで使はれたのであらう。（補註一）　さすが南蠻交通時代

の時勢に育成された俳人だけあつて、外にも同趣の附句が見える。「折れず出らず通らざりけり」に「愛になし南蠻人の劒のかね」と附け、前句「岸の陰にて何をいふらん」に「唐船の中に通事を招寄せ」と附けた類の句は、何してても時代の反映である。

何れの時代にも道學に關する述作は、時として其筋の忌憚を漏れる習ひで、彼程嚴重な吉利支丹御法度の中に焚書の厄を免れた『伊曾保物語』は、元南蠻出の書なるにも拘らず、宗旨の方からは外道の作でも、兎に角敎訓物の難有さには、當時の新文明の產物であつた活字で印刷され、慶長元和の頃世間に弘まり、慶板を重ね、繪まで插まれ、遂に傳へて天保の水越の改革時分に敎訓の近道として再び世に出たやうな始末で、今日の時勢に西文

東移の歴史の一端を敍する傍ら、此書を解說するのも因緣かも知れぬ。繪卷物や慶長活字本は、未だ見ないから分らぬが、元和活字本、寬永十六年活字本を經て、其後版式に少許小細工を施して、再三摺直して出版したらしい。改刻したのでは、萬治二年の繪入本が名高い、此外にも尙あるやうだ。何れも三卷で、同じ譯文を折々文字等を少し改めて出した位の違である。序文も何も附いてゐないので、譯者の名も翻譯の由來も知れないが、自分の見た元和活字本には誰の筆か、岡本三右衛門の譯であると、表紙裏に書いてあつた。其據所は示してない。けれども、岡本は伊太利亞の南島シチリヤ生れの伴天連で、承應三年筑前で捕へられ、翌明曆元年井上筑後守に御預になつて、江戶の切支丹屋敷

に置かれ、扶持をも與へられた著名な轉宗者で、貞享三年迄四十年餘も永らへて居り、延寶三年には申付に由て「宗門之書物」を認めて差出した事蹟もある。然し捕縛以前、寛永年中にでも、本邦の何處かで伊曾保を譯したとすれば兎に角、其譯が江戸へ來てからの事としては出版の年代と合はない。畢竟岡本三右衞門を物語の譯者とする説は據所もなし、事實にも遠い。寧ろ山崎美成が好問堂海錄（十五）に於て「元和寛永の比、やんごとなきかたのかゝせ給ふ書と桂川氏いへり、最上氏話なり、此書蠻書を譯せし始なりとぞ」（文政九年十年所記）と記してある方が手掛りとするに足りさうだ。此傳説とても固より雲を掴むやうな話で、取留がないけれど、又甫周、甫筑、甫賢三代の中何れだかも知れぬものの、實際桂

川氏から出た說ならば、幾らか信じてもよからう。譯者は依然として不明であつても、其年代は凡そ慶長元和の際として誤なからうと思ふから、今假に之を慶元舊譯本と呼ばう。此假名草子は、既に十數年前水谷氏の抄出に由て普く知られた如く、平易な俗文體で、文章として別段取立てて擧げる節はない。

繪卷物の話は姑く措き、慶長以前抄譯ながらも既に伊曾保の譯があつて、敎學の書を除けば、西洋文學翻譯の嚆矢をなしてゐる。平家物語の俗語譯と共に羅馬字に綴られ、傍ら日本語の敎科書といふ格で、平家等と合本にて出版されたのである。出版したのは、天草耶蘇會派の學林、吉利支丹の正朔で一五九三年、卽ち我國の文祿二年のこと。譯者は平家物語を口語に移したハ

ピアンと法名を呼んだ邦人であり、又此者が嘗て自分の假定した如く（補註三）、果して加賀の禪僧慧春の成れの果で、邪宗關係の記錄に見える其人と同じく、又彼の破提宇子の著者とも同人であるとすれば、愈、以て面白いのであるが、其後自分は未だ此側の研究を進めない。本書は原本には題して『エソポのファブラス（喩言）』といひ、學林の當事者の總序によると、「作者はゼンチヨ（外道）にて其題目もさのみ重々しからざる儀なりと見ゆると雖も、且つうは言葉稽古の爲め、且つうは世の得の爲め此等の類の書物を板に開くことはエクレシヤ（寺院）に於て珍らしからざる儀なり、斯の如くの極めはデウス（神）の御奉公を志し、其のグローリヤ（榮光）を希ふにあり」と開板の主旨が法界成佛得道に存するを

明にした。次に本書の首には吉利支丹版の書物の例として、「讀誦の人へ對して書す」といふ緒言がある。

總じて人は實もなき戲言には耳を傾け、眞實の教化をば聞くに退屈するに由て、耳近き事を集め、此物語を板に刻む、(中略)故にスペリオーレス(長老衆)の仰を以て此物語を羅甸より日本の言葉に和げ、種々の穿鑿の後、板に開かるゝなり。是れ實に日本の言葉稽古の爲に便となるのみならず、善き道を人に教へ語る便ともなるべきものなり。

右の文でも分るが、本書は羅甸文から譯したので、扉紙に刷つた題名の下にも「羅甸を和して日本の口と爲すものなり」と斷つてある。

此羅馬字綴の文祿舊譯本は、假名草子の慶元舊譯本とは何等直接の關係がない。書物の組立や文體などの外形上の相違は擧げるに及ばないが、二書の差別はもつと大きい。物語の順序、數量の不同はとにかく、一致しない喩言が過半數ある。初の伊曾保傳でも、話の順序や出て來るものが、互に違つてゐる。先づ文祿本には譬喩談の數が七十あり、慶元本には六十四あつて、前者が抄譯でありながら數は多く、而も俗語體でありながら簡潔に出來てゐるのは注意を要する。二本で一致する話は僅二十四五で、餘の四十程は、各一方に缺けてゐるのだ。假名草子の三卷あるに對して、羅馬字本は、他本と合本になつてゐるが、其部分だけ九十三頁ある。前者では上卷と中卷の半分とが伊曾保傳

を成し、其餘が譬草の本文であると同じく、後者も略傳と本話上下二篇とから出來上つてをる。

文祿本には、題名を『エソポのファブラス(喩言)』とし、伊曾保傳をば『エソポが生涯の物語略』と標して、「之をマシモ・プラヌーデといふ人希臘の言葉より羅甸に翻譯せられしものなり」と註した。此マキシモス・プラヌーデースといふ人は、我鎌倉時代の末期に當る頃、東歐ビザンツに昌えた著名な學僧で、後年南歐の地に萌した古典復興の芽は、彼が蒔いた種子からも出たといはれる程で、君府古學の大恩人である。鎌倉時代に著書の僞作や假託が多い樣に、伊曾保傳も此學僧に假託したのではあるまいかとの疑があるが、古寫本にも既にプ師に歸してあるのが多い

から、師の撰と定めてよろしからう。師は別に俚諺を集めて訓蒙の料に供した事蹟もあるから、傳略の著も其手に出たと考へられる。但し創作ではなくて、希伯來古傳に出た口碑を篇に著したものである。近來の新譯本には、載せてないが、此伊曾保傳は、御伽噺として極めて面白く、殊に文祿本の口語體ので讀むと、例へば柹を盜んだ話などは、狂言の「附子」をでも見るやうな感じが起る。（補註四）

司馬江漢の春波樓筆記（文化八年誌）に「伊曾保物語といふ書は西洋の譯書なり、其原本。。紀州侯にあり、予直に見たり、皆譬を以て敎を說く、玆に一二章を揭ぐ」とて喩言三章を簡約して抄出し、「此の書は二百年以前の書にて皆かな書なり、汝と云ふ事を御邊とあり、

（中略）此の書は西洋書にて、シンネベールと云つて譬喩なり、いま和蘭の書を學ぶ者、解しがたき辭にして、二百年以前西洋の學をする者ある事を知るべし」と見えた。江漢の國は紀州であるが、其藩侯の家藏で見た原本といふのは、蘭學者には解し難き辭といふからには、羅甸文か葡西文か、とにかく南蠻系のものらしくもあるが、記事簡略に過ぎたのは遺憾である。尙後日の調査を待たう。但し江漢の所謂シンネベールとは、蘭語ジンネベールド Zinnebeld であつて、羅甸系の語ではない。

南葵に傳はつたといふ右不明の原書の事は暫く措いて、文祿舊譯本は現に倫敦の大英博物館の所藏であるが、多分今明治四十三年の日英博覽會に本邦出版の假名草子本二三種と並べて

陳列される運びになりはしまいかと思ふ。 繪卷物の本は「足利時代大内氏が私に外國と交通せし頃渡來せしを所藏せしものにて、慶長年來の出來なるべしといふ」とある水谷氏の記事（列傳體小說史）にて知つた外、調が屆かぬ。 大内氏云々といふ傳へは如何だらうかと自分は思ふ。 不倒氏は又同じ史に、淺井了意の浮世物語（又浮世話、五卷寬文十年版）は其趣向伊曾保が諸國修行に胚胎したやうだと述べられたが、自分には然は考へられぬ。 文學や道話の上に伊曾保の喩言が、どの位影響を遺したかは、確には分らぬけれど、無論大した事は無ささうである。 近頃桑木氏から、ふと爲永春水作の『繪入教訓近道』といふ草草紙を借りた。 イソップの寓言が載つてゐるとのことで、讀んで見ると、如何にも伊曾保物語

の彼處此處から採つた話が十六ある。初に「君を諫し妙言」と題して東方朔の話を出し、中程に「世說といふ本に曰く」又「說苑卷十六說叢篇曰」として支那の話を擧げ、末に大黑天の事などを掲げ、出所を隱さうと企てた跡があり、序文にも「天竺唐山咄し鳥獸の物語」と斷つたり、本文にも西洋の話をも其儘採りながら、印度に歸したりして、外國種子臭くないやうにと考へたらしい。管見では、此書の名、二三の書目にも見えないし、作者は或は勸善堂主人春水と稱し、或は敎訓舍春水と號し、態と作者春水事長次郎と斷つたりしたにも關せず、第一、春水が水野越前守の風敎令で咎を受けて手錠にあつて遂に死んだ其後の、天保十五年の新板として出たのだから、無論初代の春水ではないし、(畫工も例に違ふ)、

又二代目としても如何はしく思はれる。畢竟教訓風の吹廻から起つた卑怯な文士の業であらう。插畫は貞重で、萬治板の畫の古雅はないが、今日から見ると面白い所もある。畫では明治五年渡邊溫氏が新譯の『伊蘇普物語』に河鍋曉齋が彩色した錦繪が有名だ。然し鳥羽繪ではざれ過ぎてゐる。(補註五)

今諸本から見本を一節宛抜いて示さう。長頭丸の附句に因んで獅子王の喩言を選ぶ。

獅子と犬と狼と豹との事(文祿舊譯羅馬字本)

此四疋が同心して山中を駈廻るに、獸一疋ゆき逢うたれば、喰ひ殺いて其四足を四つに分け、配らうとするに、獅子の云うたは、「われは有程の獸の王なれば、肢ひとつは王位の德に供へい、

又われ勢も汝等に比せうずる者でなければ、其威德分にま一肢はわれに與れい、又躬は汝等より速う走ることは電光の如くにして、之を留めたれば、其辛勞分に又一肢をばわれに與れい、相殘るま一つの肢にも手を掛けうずる者は卽ちわが敵であらうずる」と云ふに由て、殘る三疋の獸は力に及ばず、無體に獅子に奪ひ取られて、すごくと歸つた。

下心

人は只われに等しい人を伴はうことぢや。それを如何にと云ふに、威勢の盛んな貴人を友にすれば、必ず其得分も樂も其威勢のある人に奪ひ取らるゝものぢや。

次に假名草子本から同じ話を取る。(補註六)

獅子王と羊、牛、野牛の事（萬治本）

或時しゝわう、羊、うし、野牛、四つ山中をともなひ行に、猪に行あひ、則是を殺す、其四つのえだをわけてとらんとす、しゝ王さゝへて申けるは、「我けだものゝ王たり、其徳に先えだ一つ我にえさせよ、又我力威勢世にすぐれり、汝等に勝てかけり廻つて是を殺す、それに依てえだ一つえさせよ、今二つ殘るえだをば、誰にてもあれ手をかけたらん者は、我敵たるべし」。是に依て各空罷歸る。其ごとく人はたゞ我に似たる者と友なふべし。我より上成人と友なへば、いたつがはしきことのみ有て、其徳一もなき物也。振假名原文の儘。

文祿本との相違は特に指摘するに及ぶまい。萬治以前の本は

唯之に振假名が無いのと、文字が少許違ふだけの差である。『繪入敎訓近道』に至つては、之を長く引延ばして、更に諄々しい訓話を附加へて、題をも「身分に應せぬ人と友になるまじきたとへ」とした。首に「むかしてんぢくのくにのはなしなりとたとへていふ」と說起してある。動物喩言の印度に發したものの多いことは、無論であるが、作者が直接に取つた材料の歷々として分明なのに、右の如き餘計な文句を並べたのは、佛說めかさうとしたにも由らうが、又南蠻系であるのを掩はうとした爲であらう。前の假名草紙本に序文などのない所以や、譯者の分らぬ所以も、此簡單な理由によるのだ。

支那に伊曾保物語が譯されたのは、文祿より下ること三十二

年、明の天啓五年（西紀一六二五年 寛永二年）の事である。寫本の儘、現に巴里の或文庫に藏せられて居ると思ふが、譯者の名も知れてる。やはり耶蘇會派の宣敎師で、利瑪竇等に次いで明末に於ける支那最初の布敎者の一人で、漢名をば金尼閣、字は四表と名乘る者が卽ち其譯者である。我國のと同じく抄譯で、書名さへ『況義』としてあるし、同人の他の著書の例もあれば、漢文で書いてあるのだらう。書目によれば、Sie Meou Ming といふ者の序文が添うてゐる。西人の漢名か明人かは今知れない。譯した場處は西安府で、一冊本とある。金尼閣が同府で同年に板行したといふ書に推曆年瞻禮法二卷がある。支那、羅甸、西利亞の三國語で開板したと書目に見えてをるのに由ると、漢文から羅甸文に譯した

のであらうが、景教の祭祀に關係ある書物に違あるまい。　金尼閣は景教碑を最初に見た一人だといふが、陽瑪諾の唐景教碑頌正詮だの、艾儒略の西學凡附錄唐太秦寺碑文一篇だのの魁を成した書であらうから、昨年敦煌から發掘された景教三威蒙度讃などと共に研究したら、面白からうと思ふ。　景教の碑を耶蘇會士が發見したのも奇遇だが、今度も亦金と同國で南蠻系なる河內の秀才伯希和（ペリオー）が西域系の蒙度讃を發見したのも、奇緣と謂つべしだ。　然し右は敦煌家に委ねて、語學の方面を見ると、金尼閣には、西儒耳目資三卷（西曆一六二六年 天啓六年）といふ支那の音韻書があり、既に四庫全書總目にも歐洲新古の書目にも擧げられ、近年は我國にも紹介された。　杭州での印行である。　外には五經の羅甸

譯、史籍の著述などもあるが、布敎關係の書簡著述もある。彼は本名をニコラス・トリゴールNicolas Trigaultといひ、北佛蘭西の生れ、入明したのは西紀一六一〇年、卽ち萬曆三十八年、在留五年の後、歸歐の際は行脚して波斯、亞剌比亞、埃及を旅したといふ。萬曆四十六年、西紀一六一八年に再渡して、新鋭の多士を率ゐ來り、爾來大に仕事をした。在明中、中國の藝文を學び、翻譯著述も數々あつて、其中の『況義』の一篇は、我國のと同じ意味で、西洋の文學的作品を譯した權輿ではあるまいかと思ふ。支那西敎史の著の外、我が慶長末年より元和に係る頃の敎報もあつたが、此等の著書を殘して、師は崇禎元年寛永五年西紀一六二八年南京又は杭州で寂した。俗齡五十一、法齡三十四と聞えた。因に云ふが、支

那では其後、淸の道光年中學者某先生之を書き、其門スロース、一名ロバート・トーム之を譯述し、『意拾喩言(イッツプ)』と名けて、同二十年、西紀一八四〇年廣東で出版した新譯本がある。此譯書は其後三年を經て、福建及廣東の兩方言を以て重譯された。(補註七)

金師の『泥義』と禪僧慧春郎ち梅庵の譯かと思はれる文祿舊譯『エソポのファブラス』との和漢兩譯文を比較することの出來ぬのは、甚遺憾であるが、文祿の譯文の簡古なのは、無論此が外人の手に成つたのでないだけ優つて居はしまいかと思はれる。よしや根が御伽文學であり、敎訓文學であつて、美文學としては論ずるに足りないと云つても、兎に角此書は西洋文學飜譯の鼻祖として我國の文學史や國語史の上に忘れてはならぬの

みならず、此輕妙素樸な譯文を讀んで桃山の時代を憶ふと、興味津々として盡きないのである。成程、此以前に於て聖典の一部を始め、宗教文學の譯述は屢あつたけれども、所謂ゼンチヨの作、外道の書の和譯は、之を以て始まることは、序文に由ても推察される。傳ふる所によれば、『馬太傳』は西紀一五四八年、我天文十七年ゴアの學院に於て、我邦最初の敎徒で、シヤビエル師を日域に案內した薩南の青年パウロ彌次郎(アンジロー)が譯したことがあるといふし、パウロは師と共に翌年薩摩に著いた後にも、南天の學院に於けると同じく、敎義や信條や問答書を譯して弘法の用に供した事實もあるから、經典若しくは內典の翻譯は前後に決して珍らしくはなかつたので、現に文祿慶長頃の刊本が殘つてゐる

のは、差當りパジェーの書目やサトウ氏の解題で人の知る所である。

文祿本は羅甸から譯したのであるが、我國の信徒も御定り通り此雅言を學んだのは勿論の事、假定した譯者ハビアンも破提宇子の一二節に羅甸語で要文を插んでゐる。西國では天正七年には、有馬に敎院を設け、翌年は府内と臼杵に學林を建て、信長の城下の安土にも天正九年學林が開かれ、和葡兩國語での讀み書きを始め、羅文をも敎へたことは、伴天連の報告書や布敎史に見えて居る通りで、有馬の敎院の生徒が能く羅文に達した話や、遣南の若殿原が師から洋上羅語の讀書作文を學んだ話も殘つてゐる。（補註八）文祿の伊曾保物語と同年には和羅對譯の文典

が出來、翌々年には羅葡和對譯の辭書が成り、共に天草の學院から出版した。現に羅甸語の讃歌を平假名書にした袖珍寫本を上野で見た人は少くあるまい。又敎徒は院の內外に於て、內典のみならず外典をも讀んだことが無いではなかつたらうし、古學復興後の時勢に修行した南蠻の伴天連は、さすがに古典物の中で健全と思つた作品を少年に授けたこともあつたらう。三百年前の少年も今日の吾々と同樣に、羅甸の讀初にシーザーの戰記やシセロの論集を習つたらうか。それとも此等をも異端と見做されて、攻めることを禁じられてあつたか。抑も亦外道の書では唯道學に便ある伊曾保に限られてあつたか。

この好運至極な物語も、元はといへば、太古フリヂヤ生れの希

臘の智者アイソーポスの作と假託され、プラヌーデースの撰といはれる伊曾保傳も、やはり新希臘から傳はつたもの、共に希臘の多島海から起つた波が、地中海を出て、喜望峰を回り、印度洋から支那海へと八重の潮路を辿り來つて、我が天草の洋に打寄せた藻屑である。も一つ小亞細亞の海邊から南蠻を經て、扶桑に漂ひ、豐後邊に生立たのは、百合若傳説の本源と云はれるユリシーズ郎ちオディッシーズの話である。此傳説の源流は、數年前坪内氏の創見に由つて世の注意を惹くことになつたが、ホーマーの此名作が如何にして東漸したかに就いては、氏も疑を存せられた。時代が時代だから、希臘古典の羅甸譯をば、學堂の裡では、よしや講じなくとも、敎舍の影で少年に話して聞かせた師の坊

はなかつたらうか。同じ名匠の大作でも、それがイリアッドでないだけ面白い、オデイッシーズであるだけ興が深い。海洋思想が發達した足利時代の末に、コロンバスやマゼランやヴスコ・デ・ガマが出た後の十六世紀の後半期に、倭寇でも爲さうな筑紫邊の若者がオデイッシーズの子分の樣な南蠻人から話として傳承したらうと思ふのは、たとひ自分一人の空想であつて、歷史的根據がなくつても、愉快極まることだ。古學復興後でも舊式の修行を經た伴天連どもが、ヴージルやホーマーを御伽噺として傳へたと考へるよりも、自分は寧ろ黑船の船頭や南蠻の商人の口からユリシーズの物語を聞いたと信じたい。さう信ずべき理由は種々あるが、其は近日別稿に於て詳にしようと思ふ。(補註九)

思ひがけなくも希臘の大篇小作が、黒船や吉利支丹と共に此絶島に渡つたのは、史興を催さしめること一通でないが、セリス、セリカの彼絹絲の、東西を連ねた一縷の路より健駄羅美術が禹域に入り、同じく佛敎と共に我日出國に東漸した其迹を懷古し、此二大宗敎が千歲を隔てて、遠西の地から海陸兩方の筋道に依つて日東に文華を傳へた事蹟を偲ぶのは更に趣味が增さる。然し希臘印度式の美術の傳來を以て、一小伊曾保物語の和譯に對するのは、固より比倫を失して居るが、法隆寺の柱のエンタシスは兎も角、漢鏡の葡萄模樣や、玉蟲厨子の唐草模樣に希臘を想出す人は、同じ希臘の文海に生えて東流した藻屑ともいふべき此物語の由來に感興を惹かぬことはあるまい。（『太陽』十六卷五號 四三年四月）

補註

（一）長崎先民傳巻下流寓に「松永貞徳　遊四方又來崎居頃之歸京」とあれば、長頭丸が崎陽の異風殊俗に親んだことが分る。

（二）繪巻物の存在は水谷氏の史で知つた外、幸田露伴氏からも、前田香雪翁が其物を見られたと云ふことを聞いた。然るに昨四十三年四月發行の「此花」第四枝に大槻如電翁の「伊曾保物語のものがたり」と題する詳說が見えて、右の繪巻物に關する事が發表された。それに由ると、如電翁は先年故巖谷一六翁のもとで、何處からか賣物に出た伊曾保物語の繪巻物三本を見られたが、その本は書畫共に雛屋立圃の手に成つた珍品であつた、然し兩翁共に之を購はれなかつた、多分外國人の手に入つたであらうとの事である。

尚大槻如電翁は、此物語の反譯は京都の公家衆の手に成つたものだと云ふ說に同和して、烏丸光廣卿などの才覺で出來たのであらうと述べ、更

に進んで萬治本の插繪は、其畫風固より立圖のに相違してゐるが、其圖案は立圖と光廣との二人で凝らした意匠であるかも知れず、卽ち立圖の繪卷物の圖に因んで書林伊藤三右衞門が普通の畫工にかゝせ、插圖にして彫刻させたと見てよからうと推定された。(其他或點については同翁の訂正文同誌の次號に見ゆ)。

立圖は別に『をさな源氏』『十帖源氏』の如き繪入の通俗書を作つたこともあるから、如電翁の述べられた事實推測共に然るべき筋のことと考へられる。　餘事ながら貞門に出た立圖は句集に富んでゐるが、其三四を閱した所では存外南蠻物から材を取つた句は無いやうである。

連歌を詠んだ徒と南蠻人との關係は、ロドリゲーズの日本文典大本の弖爾波の部の所說に由て推すことが出來るし、細川幽齋も一時耶蘇教に歸したといふ一說(忠興夫人の話や忠興の羅馬字の印は有名である)もある位であるから、光廣が伊曾保物語の翻譯者であらうとの考は、今直に其人とは斷定出來ぬけれども、見當は大抵外れまいと思はれる。

昨四十三年八月伊勢の神宮文庫でも伊曾保物語の古寫本を見たが、開版以前のものとしても、さほど古くは無い。但し内容も體裁も流布本と變らぬ。如電翁が慶長五年以後を以て、國字本の伊曾保の成つた時と定められた其根據は取ることは出來ぬが、時代は略ゝ當つてゐると思ふ。同翁も亦慶長活字本の存在を信ぜられたが、未だ見聞に上らぬさうである。

（三）史學雜誌四十二年九月十月第二十編第九及十拙稿「天草出版の平家物語拔書及び其編者について」參照。

（四）尙暗合ながら、シャント夫婦の仲違ひ仲直りの條が狂言式であること、エルミッポがエッポを庇護する一節が謠曲の滿仲式であることも面白い。但し國字本には、他に色々の話が載つてゐるかはりに夫婦喧嘩の條は缺けて居る。

（五）明治五年渡邊溫氏の新譯は「通俗伊蘇普物語」と題し、平假名木版本六卷で、寓言譬喩の數は二百三十七ある。挿繪は曉齋の外に塞郁が畫いてゐ

る。繪に其插畫を彩色とし又戯畫としたのは誤で、彩色のは錦繪で、やはり曉齋の畫ではあるが、畫解の文は渡邊氏の作では無い、別人の抄で、人形町上州屋から出版した。予は露伴氏所持の分で數枚十話見ただけである。

（六）渡邊氏の譯文を參考に擧げておく。

獅子と他の獸と狩に出た話

獅子と他の獸と狩に出て、肥たる鹿一頭を獲たり。その時獅子自ら行司と稱し、是を三ッに引裂いて、扨云けるは、一拙者獸長の事なれば、官資として先ッ一ッ引取べし、其次は拙者狩に加りたる事なれば、自身の所得としてまた一ッ引取べし。第三分に至りては、誰にも吾言を肯ふもの是を引取べし。

威勢の盛なるものには、我意の振舞多きものなれ(補)

右の喩言では、俗文のみで綴られてあるが、他には明治初代新東京の口語が澤山あらはれてゐる。

(七) 香港英華書院の原刻本を阿部弘國氏が訓點を附けて明治九年九月東京で新雕した「漢譯伊蘇普譚」(全一册大槻磐溪序)といふのがある。藤井紫影氏の示されたものである。寓言の數は七十三。今左に其漢譯の一例を示す。

獅驢同獵

大禹時、獅子與笨驢同獵、得一羊、論理則當平分、唯獅貪心頓起、遂曰吾乃獸中之王、理應多分一股、驢不敢駁、獅猶不滿意、又曰、所得之羊、皆吾之力也、又應多分一股、驢知勢不可爭、亦强從之曰、請卽分之、獅心仍不足、憤然起曰、分則不分力大者得之、於是全得、驢乃逡巡退讓、悔曰、强弱不可同事、此我之愚也、俗云世事讓三分、莫道人强我弱之謂也、

尙別に渡邊氏の通俗伊蘇普物語を外國語學校の敎科書として、中田敬義

氏の譯した「北京官話伊蘇普喩言」全一册といふ名が、渡邊氏の書に附した廣告に見えてゐる。

（八）羅甸語を學んだ著名な邦人の中に是非加へればならぬのは、ガラシア細川忠興夫人である。葡羅兩語をよく綴り得たとクラッセーの史にも稱してある。

（九）百合若物語の出典に關する臆說は、自分も「藝文」第一年第三號（四十三年六月）「南風」の中、六、「ルシアダスと百合若物語」の中で合鎚を擊つたが、近頃「人類學雜誌」第二十六卷第三百號（四十四年三月）に於て南方熊楠氏も「西曆九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」の補註（二一六―二一八頁）の中で之に和せられた。但し、反對說も、既に出て居る。高野辰之氏の「壹岐の百合若傳說」（早稻田文學四十年二月）の一篇の如きはそれである。

伊曾保樣喩言の系統及結集の由來は我國に於ては始めて

補註

上田敏博士明治四十三年十一月二十七日京都に於ける史學研究會に於て「伊曾保物語考」と題して詳說された。其梗概は既に世に出てゐるが史學雜誌四四年四月二二編四號彙報全論は早晩史學研究會講演集に掲載されることゝ思ふ。尙今明治四十四年一月號六條學報所載の同博士が「菩薩物語由來」は、同じ論の分身と見られる。

文祿本には、慶元本等に存しない「百姓と兒共の事」と題する話があつて、多勢の子を有つた農夫が、樹の細枝を以て子等の不和を戒めた寓言がある。これは廣く人口に膾炙してゐる毛利元就の遺訓と稱する箭の束の古話を思起さしめるのであるが、この箭の話は後人の附會であつて、元就の遺誡狀を始

め、正しい史料には全く跡方もないことである。これは今の文學博士瀨川秀雄氏が既に史學雜誌（第十三編七年三月）上に於て說破された所であつて、今更疑を挾む餘地はない。山口は南蠻の宣敎師が夙に入込んで布敎に力めた地ではあるし、元就の代に西洋の伊曾保喩言が敎草として傳說されたことも無いとは云へまいけれども、(1)所謂遺訓の出典が德川時代の中頃より古くないとすると、この推察の根據も薄弱であるわけだ。無論正史上の根據は如何であつても、傳說の由來さへもつと早ければ、それで如上の推定說の確かさを增すのである。然し箭の束の遺訓は、始めて享保末年又は元文頃の稿とおぼしき「前橋舊藏聞書」卷五（史局本）に見えて居るとすると、俗傳の起因も新

しさうに考へられ、且又(2)其記錄の出來たのが、酒井家が姫路に轉封以前、厩橋に於てであつて、其場所が防長と緣の遠い地であるだけ、彼の推定說は信じ難くなる。

箭の話は、崔鴻の「西秦錄」に見える吐谷渾阿柴の故事と暗合すると、大槻磐溪は「近古史談」に說いたが、暗合よりは寧ろ我が彼に據つたものであらう。口碑で傳はつたのでは無くて、寧ろ書物の上より得たのであらう。「西秦錄」は、「十六國春秋」の中の一であるが、元來「十六國春秋」編述の時代には疑が存する。漢魏叢書本に由て「西秦錄」を閱するに、阿柴の訓言は見えぬし、他の一本にも缺けてゐる。或は「太平御覽」(卷三四九兵部八〇箭上)所引のものに據つて、藝侯諸子を戒める話を組立てたのかも知れぬ。

同じ話は「魏書」一〇一卷列傳八九吐谷渾にも見え、更に之より出て「北史」(3)九六卷列傳八四吐谷渾にも載つてゐる。此等の二史の文は無論殆ど同じであるが、話の筋は前の載記にも見えるのと違はない。

吐谷渾は南北朝時代には中國の西邊に據つたが、本、遼東鮮卑から出たとすると、箭の喩言は此故地から傳へた話とも見られる。西紀第六世紀の中程に當る阿柴の時代から尚數世紀を經て、蒙古の名媛阿闌(アラン)が孛端察兒(ボドンチャル)を始め其五子に向つて、臨終の際にやはり箭の喩言を以て和合を諭すことが、「元朝祕史」(4)一卷に見える。吐谷渾での話と、蒙古での話とは父(阿豺魏書)また阿柴(西秦錄)と母(阿闌)との差、子どもの數が二十人と五人との違ひで、共に臨終に當つての訓言であり、精神は全く同一であ

るから、同一根原の喩言であることは疑ひない。而して吐谷渾の故地も蒙古も中國からの方角は略、同一であるから、說話の出來は中國の北部又は東北部に出たと見做される。但し一方の話は他方より書物上で借りたものではなくて、寧ろ口碑上で傳へたやうに見える。自分の豫想では、更に西の方の民族から得た喩言ではあるまいかと思ふが、それは今後の研究で段々明かになつて來るだらう。

伊曾保喩言にある細枝の束を以て訓へた農夫の話の出典は、いづれにあるか、未だ不明であるが、箭の束の譬喩譚に緣を引かぬことは無からうと考へる。それを調べると、東西說話喩言の連鎖を攻究する上に良い手掛りを得るに違ひない。

(1) 中尾傘瀬氏、イソップ物語と毛利元就遺訓、早稲田文學四〇年四月（一七三頁）。
(2) 文學博士辻善之助氏の指示に據る。
(3) 失名氏、イソップと元就遺訓の別考、早稲田文學四〇年六月（一二八頁）。
(4) 故文學博士那珂通世譯、成吉思汗實錄卷の一（一一及一一三頁）。

文祿本を言語史料として觀、その發音、綴字、語法、語意等を調査するに方つては、慶長元和年間南蠻人編纂の日本語法及辭書を參照するの要がある。即ちロドリゲーズの大小兩種の日本文典（大一六〇四慶長九年長崎刊　小一六二〇元和六年媽港刊）と、宣敎師等同纂の和葡辭典（一六〇三慶長八年長崎刊）とを以て隨一の資料とする。然し、此等の語學書は得難く、又覽易くないから、不完全ながら右の小文典の

佛譯本（ランドレッス纂譯一八二五文政八年巴里刊）と、右の和葡辭典の佛譯書なる和佛辭書（パッジェー纂譯一八六八明治元年巴里刊）とを參照しても、益する所がある。コリャードの日本文典（一六三二寬永九年羅馬刊）及日本辭典（同上）も參考になる。尙サトウ氏の日本耶蘇會刊行書解題に擧げた諸書の原本、或は同氏の手に成つた其抄文をも合はせ見られよ。此等數種の書は我國にも往々眼に觸れる。

尙最後に附加へておくが、右に擧げたロドリゲーズの日本大文典にはエソポの和譯文が實例に引用されてゐる。文祿本に由つたに違ひない。

洋語對照表

本書	原書	國字本	備考
アテナス	Athenas	あてえなす	
アモニヤ	Amonia	あもうにや	
エウローパ	Europa	えうらうは	
エソポ	Esopo	いそほ、伊曾保	
エヂット	Egypt	えしつと	
エルミッポ	Ermippo	ゑりみほ	拉丁名 Hermippus
エンノ	Enno	えうぬす	拉丁名 Ennus
グリホ	Gripho	きりほ	半獅半鷲の怪禽、英語の griffin

洋語對照表

グレゴ	Grego		
グレシヤ	Greçia	けれしや	
クレツソ	Cresso	けれそ	拉丁名 Croesus
コレジヨ	Collegio		學林
コンパニヤ	Companhia		會
サモ	Samo	さん、さむ	
シヤント	Xantho	志やんと	
スペリオーレス	Superiores		長老衆
ゼスス	Ie(s)vs		
ゼンチヨ	Gẽtio		外道

デルホス	Delphos	てるほす	
トロヤ	Troia	とろや	
ナツラ	Natura		本性
ネテナボ	Nectenabo	ねてなを	
パストル	Pastor	はすとる	牧者
バビロニヤ	Babilonia	はひらうにや	
パン	Pan		麪包
フヮブラス	Fabvlas		喩言
フリヂヤ	Phrigia	ひりしや	
マシモ・プラヌーデ	Maximo Planude		

モルテ	Morte		死神
ラチン	Latin		
リセロ	Lycero	りく(う)るす	拉丁名 Lycerus
リヂヤ	Lidia	りいひや*	* Libya

右は文祿本(外題緒言共)中の洋語を擧げて慶元本中に見える洋語と對照したのであるが、讀方の互に相違する所が多い。國字本が拉丁讀をも採つたのに對して、文祿本は全く葡萄牙讀にしてしまつた。國字本には和蘭の訛りの外に、誤讀が二三ある。大英博物館所藏古刊本中、西班牙文のものに屢、Isopo, Ysopo と標してあるのを見かける。但し Esopo と標し

たのは西文にもあるが、伊文葡文の古版本に多い樣である。

畫圖解説

文祿本にも見える樣な「醜いこと天下無雙であつた」伊曾保の畫像をかいた巨匠ヴェラスケスは、西班牙王フェリペ四世の朝に仕へた院畫家であつて、我が探幽と正に時を同じうして榮えた。繪所に在つて王公貴妃を畫き、竹の園生を寫す外には、能く侏儒癡人の醜をも筆に上せて、丹青の技に不朽の名を殘したこと言ふもおろかである。名高いカール・ユスチの畫史（第二卷一九〇三年再刊本二八六至二八七頁）に據ると、この賤隷伊曾保の像は、畫家が晩年の作で、之を畫くに先だつて、アリオストーの詩曲 Orlando Furioso 中の一節

を誦し、Bisunto e sporto, e d'abito mendico「ふとつて、きたない、そしてこつじきのきるもので」などとあるくだりを取つたらうと云はれてをる。右手に豚の皮表紙のフップラスを持つた異形の人體は、文祿本にいはゆる「眼はつぼう、兩の頰は垂れ」の相ではあるが、「頸はゆがみ丈は低う横ばりに、脊はくゞみ、腹は腫れ垂出て」とある趣は皆無だ。ユスチが疑つた如く、何故畫家は不具のモデルを選ばなかつたか分らぬ。然し一くせありげな人相は、よく其妙手にあらはされた。原圖(一、七八×〇、九四)は西班牙の國都なるプラド畫館の所藏であるが、昨四十三年五月今の京都文科大學教授深田康算氏が南遊の際に其寫眞を得て贈られたのを、今度複製して本書の首に飾ることにした。畫伯湯淺一郎氏が原

畫の摸寫は昨年四月の白馬會の展覽會に陳列された。

文祿本の原書はヴレニャーニが南國より舶載した活字を以て天草で印刷したもの、其寫眞はわが元和活字本の寫眞と相對して興味深く、又本文の中に插んだ木版四箇は、雛屋立圃の立案ではないかとの一說もある萬治本の插繪を摸したのである。嵯峨版といふ寬永活字本の寫眞を示すことの出來なかつたのは遺憾である。因に云ふ、本書表紙の背、扉及內題の文字は、元和活字本の文字を摸刻したもの、又表紙の意匠は中村不折畫伯の手に成る。

豐後國府內のコレジオ(學林)と、肥前國有馬のセミナリオ(學院)との二圖は、東京帝國大學文科大學史料編纂掛架藏の寫眞より複寫したもので、原寫眞は今の史料編纂官村上直次郎氏が、一五九六年(慶長元年)羅馬で公刊の、法王グレゴリオ第十三世功業錄とも云ふべき書中より撮影されたものと云ふ。此等の建物は一五八二年(天正十年)に成つたもので、其建築資金は羅馬法王の寄附にかかる。天草の學林は、後年の建立ではあるが、此等の建物に準じて面影を知ることも出來る。此樣な庠舍に於て三百有餘年前の內外の邪宗徒は伊曾保物語などを讀誦したものと想ふ。

明治四十四年六月廿一日印刷
明治四十四年六月廿五日發行

（伊曾保物語）
（定價金壹圓）

校訂者　新村出
東京市小石川區小日向水道町七十三番地
發行者　西野虎吉
東京市京橋區築地三丁目十一番地
印刷者　野村宗十郎
東京市小石川區小日向水道町七十三番地
發行所　開成館
【振替口座】東京第五三二二番
大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角
販賣者　三木佐助
東京市日本橋區數寄屋町九番地
販賣者　林平次郎